

146
489

明
香
業
談



梅雪山人編
集文錄後行



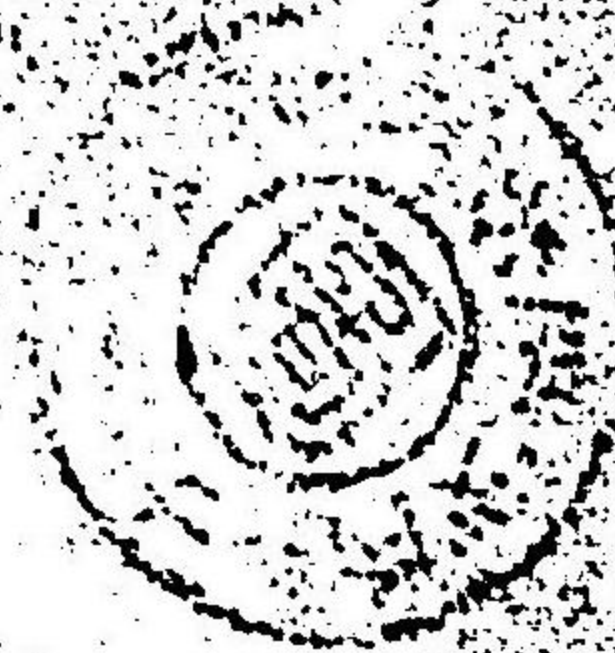
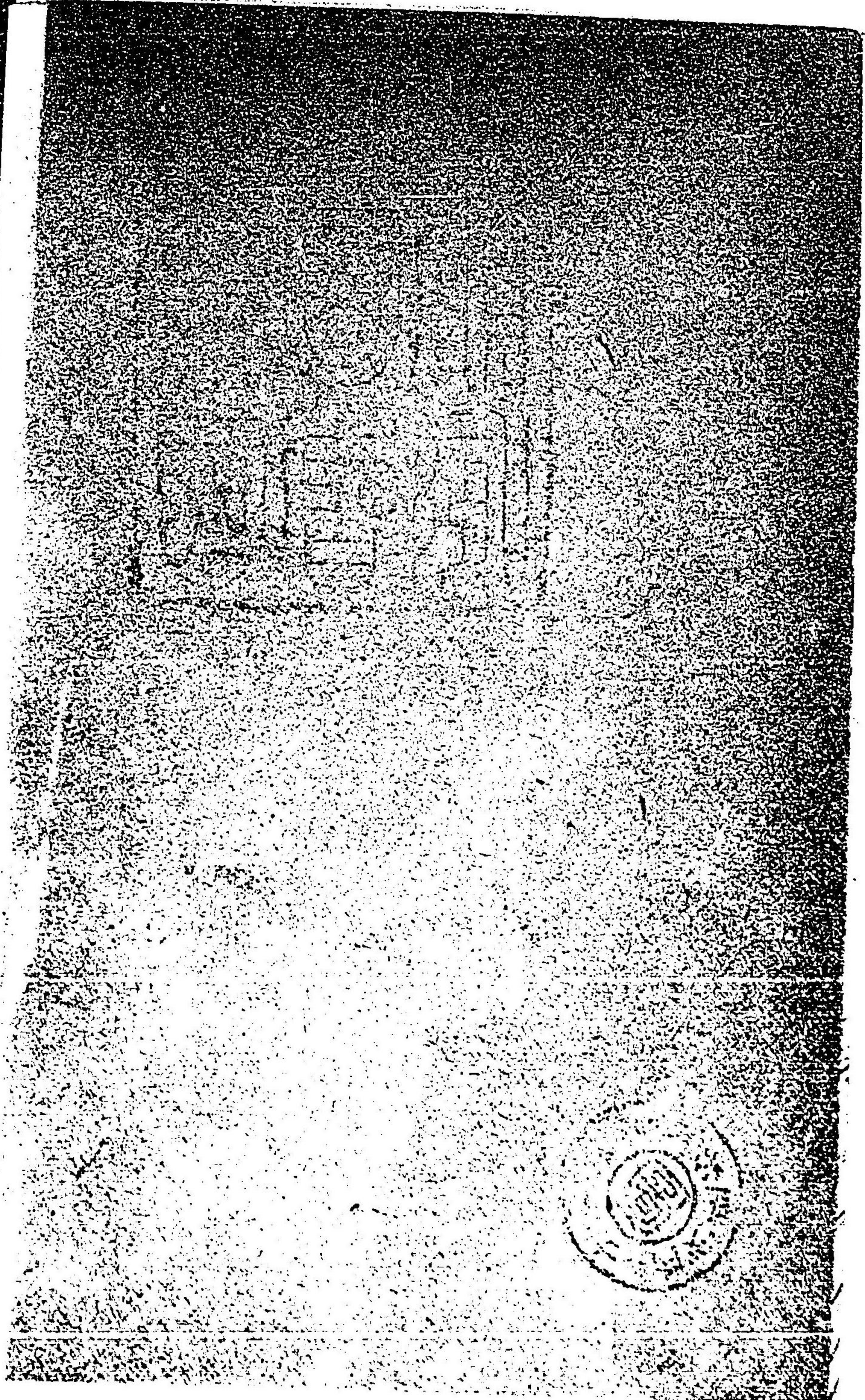
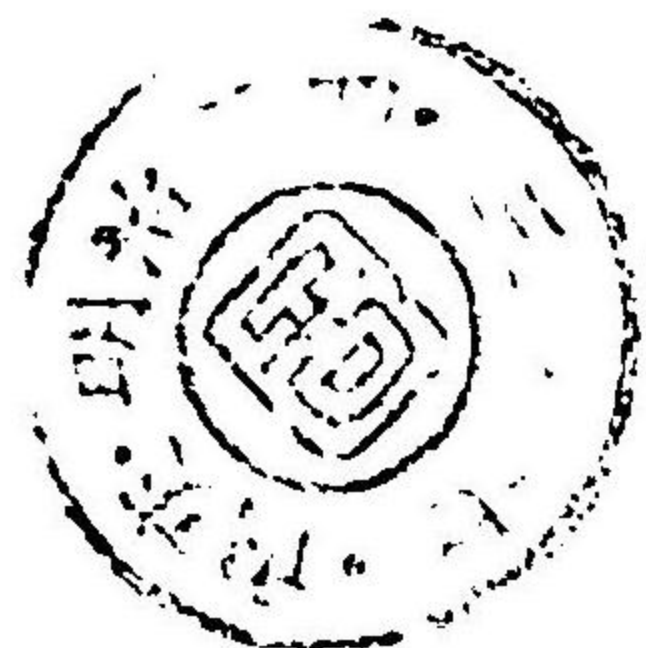
特63

460



一
言
利
人
語
救
急

楊
升
居士



頓智叢談序

頓智とは如何なるものかと云ふに即ち常座即
席事に當り物に觸れ間髪を容れざるの暇に思
考する心性の作用なりされば世間に例なき不
思議の思考も未曾有の名案も事に當つて遽に
出てざるものは頓智と云ふべからず非常の事
に遇へば只呆氣に取られ前後の考へもなく忙
然として一時智力の作用を鈍くするとあり鬼
角咄嗟の間には工夫の附かざると通例なり後
にて考ふればアノ時は斯くすれば善かりし彼

の事は斯様にすれば好都合なりしなぞ思ひ反せども其時は最早六日の菖蒲十日の菊にて遅蒔唐辛子何の利目もなき事なり然るを臨機應變事に當る真正の頓智は能く怒を遷して笑となし或は禍を變じて福となし忽ちに事を處し物を辨するを得其効力亦大ならずや頃日櫻雲山人頓智叢談を編み以て頓智を練るの好材料となす世人之れに因て才智琢磨の一助となすを得ば編者の勞空しからずと云ふべし聊か一言を序す

芙蓉山人識

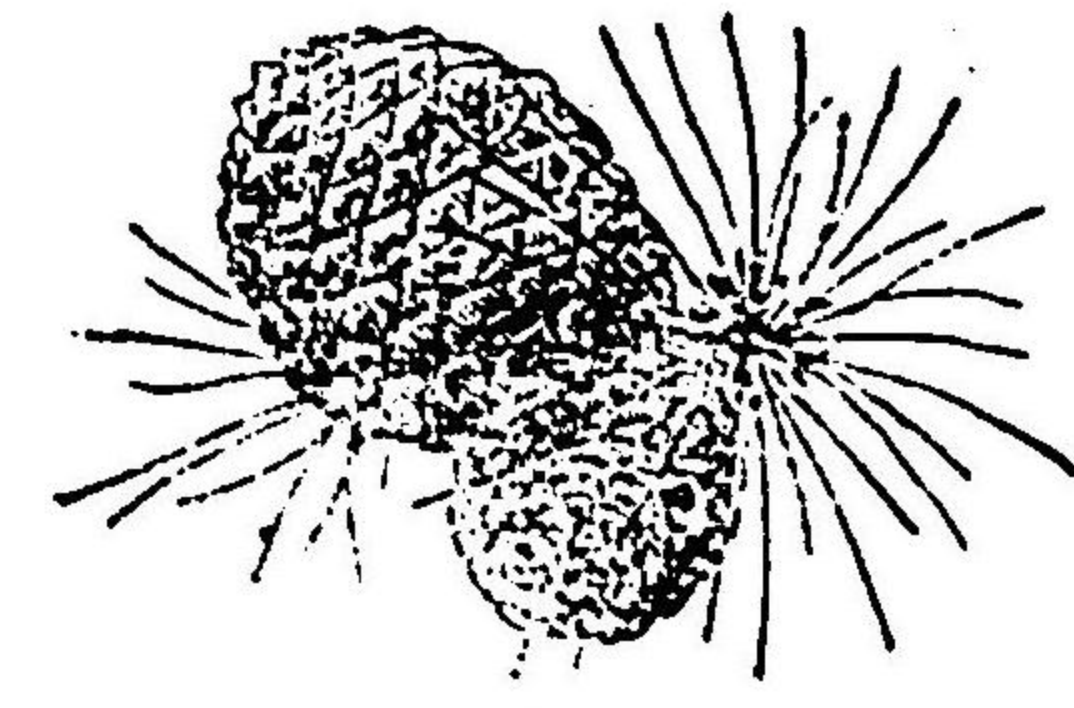
頓智叢談目次

◎名馬池月の首尾……………	一	◎溝中の奇策……………	二
◎宇治川先登……………	三	◎人を制す……………	三
◎司馬温公が齏碎……………	四	◎三十六計……………	三
◎一本橋のさる籠……………	四	◎浴後の赤面……………	四
◎象の口方……………	五	◎鎗先に美服……………	五
◎成政の梅干……………	六	◎孰が昇夫乎……………	七
◎火中の働き……………	七	◎其がしまい……………	七
◎茶三杯……………	七	◎性を學ばず……………	九
◎物は利用にあり……………	八	◎蛙の禪……………	一〇
◎巨人の比較……………	九	◎強姦家の失敗……………	二二
◎一夜の築城……………	九	◎還るは往ふり……………	二四
◎儒者の問答……………	一〇	◎無いとは手管小供迄……………	二五
◎愁を變じて笑を爲す……………	一一	◎争兒の斷訴……………	二七
◎昇怯に非ず……………	一一	◎開て破驚高麗の蓋……………	二八

◎棄た魚に金は不背……………	三一	◎骨物に非ず……………	六一
◎遊魚は居らざりし乎……………	三六	◎角力壯士……………	六二
◎筍の死骸……………	三七	◎左右共に全し……………	六四
◎椀が變れば……………	三九	◎虎にも亦氣ある乎……………	六五
◎叱言もせんく……………	四〇	◎來高去低……………	六七
◎母ア頓智歟……………	四一	◎二國の語を解する鸚鵡……………	六八
◎當り矢……………	四四	◎破器と詫をさせる……………	六八
◎老龍制壯……………	四六	◎南無阿彌陀佛……………	七〇
◎冷しいのが敷寄屋……………	四八	◎ソウ旨くは……………	七二
◎關路の黃門……………	四九	◎ケンセキを恐る……………	七三
◎蚌鰯の闘ひ漁夫の利……………	五〇	◎一步はをろか三万舎……………	七五
◎春章一喬値千金……………	五二	◎天文學を知るか……………	七六
◎古コンブろう……………	五三	◎君も僕も……………	七七
◎長安近歟日近歟……………	五四	◎可愛ろう……………	七八
◎遊治郎無錢遊興じた後は……………	五六	◎國家の大石……………	七八
◎頓智活眼を醫す……………	五八	◎鶯宿梅……………	八〇

◎不平九郎あるべし……………	八一	◎ワウ生したか……………	一〇二
◎天の窟戸より手力雄……………	八二	◎大より小に及ぶ……………	一〇三
◎御体操……………	八五	◎能く下を憐む……………	一〇四
◎雷の初音……………	八五	◎登り詰めてから梯子……………	一〇五
◎悪口をいわしみず……………	八六	◎毒を符す指を嘗む……………	一〇六
◎頓智湯……………	八七	◎頭を打て却て禮を受く……………	一〇七
◎しを投げて閉口……………	八八	◎手代の失敗……………	一〇七
◎即座のさい智……………	八九	◎宇兵衛は宇兵衛……………	一〇八
◎野田二平氏の略傳……………	九〇	◎瀬船の走るを止むる法……………	一〇九
◎一本の筆新聞屋を賑す……………	九三	◎焼芋ふら十三里……………	一〇九
◎商人のみふらず……………	九三	◎先生の失敗……………	一一〇
◎身を知る雨……………	九四	◎主人の失敗……………	一一一
◎居候か置き候か……………	九七	◎衛生家……………	一一二
◎晝間の夜鷹すき……………	九七	◎物を取返す法……………	一一三
◎一石橋下二本橋……………	九八	◎頓智が道連れ……………	一一四
◎よく精察す……………	九九	◎物置場に入て出で來らず……………	一一四

◎病者と醫者……………	一一五	◎鶴の一駢……………	一四八
◎困つた故頼智……………	一一六	◎軍略……………	一四九
◎滑かに解けたも道理露汁ふり……………	一一六	◎お供は頼智……………	一五〇
◎不思議の講釋……………	一一八	◎策略の廣告……………	一五〇
◎助太刀……………	一一九	◎辯解を要せず……………	一五一
◎雑巾の夢……………	一二〇		
◎實もあり味もあり……………	一二一		
◎那々成程……………	一二二		
◎一言賊を走らす……………	一二三		
◎小僧の困却……………	一二三		
◎栗子屋……………	一二三		
◎鐘馗の晝寢……………	一二四		
◎量入制出……………	一二五		
◎脇坂七兵衛奇行録……………	一二七		
◎見かけに依らぬ……………	一四五		
◎一場の演劇……………	一四八		



櫻雲山人編

頓 智 叢 談

◎名馬池月の首尾

佐々木高綱は近江の領地に在り義經の軍に従ふに先きだち馳せて鎌倉に到り頼朝公に謁す名馬池月を得んが爲めなり公高綱に謂つて曰く汝近江に在りと聞く何んぞ直に軍に従はざる高綱答へて曰く一度軍に従はゞ固より死を決す故に公に謁して訣別せんと欲し急行して來る我が馬既に勞れたり願くは池月を賜へど

公之を許し併せて曩なほきに景季が池月を請ふて
與ともへざりしを記憶きおくせよと命せらる高綱喜びて
池月に跨またり西に馳せて浮島が原に到る是より
先き景季高丘たかに登り賜ふ所の名馬摺墨すゑを曳ひか
せて衆に誇る偶一馬嘶うなく聲あり島山重忠じまやましげただ曰く
是池月の聲なり何を以て此處こゝに來ると已すでにし
て高綱の僕池月を曳きて丘下きうかを過く景季大に
怒り高綱と決戦けつせんせんとして高綱を待つ高綱來
るを見て景季問て曰く君が乗のりは公の賜ふ所か
高綱答へて曰く聞く摺墨すゑ既に君に賜ふ池月命いのち

を得ず余は馬なきを憂ひ公の庭にわにつき之を盜
む歸りて後ち責問せきもんあらば君幸ひに余が爲めに
之を謝しやせよと聞きて景季が怒り解けたりとぞ

◎ 宇治川先登

往昔むかし木曾義仲きそぎよむねと源義經みなもとよしのぶが宇治川うぢがはを隔へて、對陣たいじん
の時、梶原景季かひらぎよすねと佐々木高綱ささきたかねと先を争ふて流ながれを
亂わだる是より先高綱曾て鎌倉を辞するに當り頼
朝公に向ひ生きて戦ふと聞かば先登する者は
高綱なりと言上せしに景季將に先を占めんと
す高綱呼で曰く馬の腹帯はらおびが延のび候ふ鞍覆くらひされ

て怪我あるなど景季之を聞きて馬條を緊す高網間を得超乗して前岸に達す義經檣上に在りて筆硯を採り録して以て高網先登第一となせり

◎司馬温公が甕碎

温公幼にして衆兒と戯る偶大甕あり一人の小兒誤りて満水の甕中に陥る群兒救はんと欲して救ふ能はず温公直に巨石を捧げて甕を碎き兒を救へり今に傳へて之を賞せざる者なし

◎一本橋のざる籠

昔時或る處の溪流に架したる一本の丸木橋あり魚を商ふて歸る者前後に空籠を擔ぎ中央に進みし頃二人の武士ありて前後より同じく渡り來る武士の事とて何れも後に反らず互に魚商を狭みて争ふ魚商中間に在りて一策を案し二人の武士を前後の空籠に坐せしめ自分の肩にて回轉し二人の武士を難なく渡らしめ自分も一方の後に尾して全きを得たり

◎象の目方

大象あり其重量を争ふ象之を量るに困む一人

ありて之を指揮し大象を舟に乗らしめ先づ舟の沈水を量り更に象を陸上げして他の石或は荷物を満載し象の乗れる時の沈水と同じからしめ其石其荷物を量り合して象の重量を得たりと云ふ

◎成政の梅干

佐々成政は軍勢を率ゐて越中の立山を越ゆる時に坂路險峻の爲め軍勢みな大に渴し水を得んと欲すれども得可からず成政大聲に令して曰く下るべし麓に到らば梅干を多く貯ふ一村

あり探りて以て與ふべしと軍勢之を聞き口に唾氣を生じ遂に渴を癒したりと云ふ

◎火中の働さ

曾て外神田の大學病院附屬第二院出火の際に樓上に在る看護婦某は一人の赤子が残れるを認め之を救はんと欲して手術なし忽ち一案を得て赤子を蒲團に包み樓窓より之を投じて全きを得たり

◎茶三杯

太閤馳せて山寺に入り渴して茶を求む光成當

時幼にして當寺の兒僧たりしが直に一椀を呈す微温にして満てり太閤再び之を求む漸熱くして七八分に満てり三たび之を求めて量少なくして熱し太閤呵して之を呑み兒僧が智を洞察し遂に擧げて之を用ひたる者即ち石田光成なり

◎物は利用にあり

二十七八年の役に一夜軍勢は鴨綠江を渡らんとす暗黒にして進む可からず軍中の一人忽ち一案を得て高野豆腐に石油を瀉ぎ火を點して

多く之を流れに浮べ以て水勢を照らし頗る其好結果を得たりと云ふ案者誰なりしか聞かんことを待つ

◎巨人の比較

漢學書生が云ふ支那にはピンシケンとして鬚四間の人ありしが如何に巨人なりしかと戯れたり傍に又一書生あり然し日本にも折に觸れてホウハツチャウの人あり豈鬚四間を巨人とせず不足らんやと云へば滿坐大に笑ふ

◎一夜の築城

太閤曾て城を築き一夜に落成せしめんとす衆
みな其城壁に困む太閤直に白紙を買ひ來らし
め糊を以て之を貼り附け乍らにして白堊の城
壁を成せり衆其猿智恵に驚く

◎ 儒者の問答

一人の學生がホウキセンリコレダミノトヤマ
ルトコロ(大學)と讀みしを聞き或人問ふて曰く
千里もある筈は如何なる人が用ひたるならん
一人あり忽ち答て曰く其筈は白髪三千丈(唐詩
選)の人が用ひたるらしと是亦一笑の値ひあり

と云ふべし

◎ 愁を變じて笑と爲す

杉孫七郎の長州藩にあるや海路兵を大阪に送
る偶々暴風に遇ひ怒濤山の如く兵士皆色を失
す孫七郎士氣の沮喪するを憂ひ忽ち一策を案
し舷頭に起ちて股間を開き大聲して衆を呼ぶ
衆來り見て失笑す爲めに大に元氣を恢復せり
と云ふ

◎ 卑怯に非ず

佐賀藩の勇士木原義四郎上野戦争の時衆に先

とて進む既にして彈丸雨飛義四郎頭を俯して
進まず同藩士某呼で曰く君卑怯なりと義四郎
曰く草鞋の紐解く故に結び居るのみ

◎溝中の奇策

中井櫻州常に奇策を以て名あり一日某家の女
を目送して思へらく誠に絶世の美人なりと遂
に女に追従して到る門前に溝あり忽ち一策を
案し溝中に投す家人之を見て出て救ふ櫻州痛
苦の体をなし家に入り暫時休息を乞ふ家人介
抱願る力む櫻州翌日贈物を爲し閑談數時巧に

家人を籠絡し後屢々其家に出入して遂に其女
を娶れり

◎人を制す

西郷吉之助の參謀たるや一隊を率ゐて川崎に
在り時に勝安房往て西郷を訪ふ護衛の兵士門
を擁して入れず勝安房大聲して曰く西郷は何
處に居ると護衛の兵士驚て門を開く

◎三十六計

井上聞多の長崎に在るや一日街上を徘徊して
一壯士の刀に觸れ遂に決闘を挑まる聞多謝す

るも聽かず依て互に決闘を約し相携へて行く途中或る酒樓の前に到る聞多忽ち一計を案し壯士に謂て曰く余の生死知る可からず請ふ此楼に入り別れの杯を傾けんと壯士諾して共に登る既にして酒出て妓來る壯士恍惚として興到る聞多其間に乘じて樓下に到り「あの客は未だ歸らず僕は急ぐ故……」と言ふて逃げ去る

◎浴後の赤面

まだ舊藩の頃或夜一人の娘が某湯へ入浴せし處其頃は今のやうに男女の境界正しからざり

しものゆゑ同じく入浴中の一人の若き男が多人數の混雜にまぎれ暗き隅にありて其娘に對し何か怪しき舉動をなすに予娘は匆々にして揚りたり斯くて其男も何喰はぬ顔にて引續き揚りしがこは如何に何時の間によら我が鬚の元結を切りありたり是なん彼の娘が見覺ゆのため斯くしたるものにて段々先きの無禮を責められ大に耻を蒙りしといふ

◎鎗先に美服

天正の頃山名豊國道禪高入と云ふものあり或

夜十數人の盜賊禪高が家に押入れり折ふし禪高が家に人なかりければ禪高自ら鎗を取りて躍り出て老法師が手なみを見せんとて挑み戦ふ時に禪高の妻は心雄々しく機轉あし人なりしが納戸より美しき衣服を多く持ち出で小蔭にかくれて賊の鎗先に投かけくしけるに賊は之に纏からまれて其働かき自由ならず且つ小袖の美しきを見て心奪はれひるみの體なり禪高之に力を得て數人の賊を突伏せければ残る者共は皆散々に逃げ去りしと

◎孰が昇夫乎

管仲已に擒となり魯より齊に護送せらるゝや以爲らく魯國の謀士施伯悔て必ず追はんと輿中に在て昇者かこに謂て曰く吾面白く謠はん汝等調子を取て走れと於是人々勞苦を忘れ馳せたり追者竟に及ばざりし

◎其がしまい

米國聯邦の中には只一夜男女同室に臥すのみにて翌朝は直ちに夫婦と認めらるゝ法律の行はるゝ州ありて之を利用して無理に夫婦とな

るものもありとか先年一人の娘ありて或少年
を戀ひ慕へり其少年は容貌風采共に氣高く家
には巨萬の富を貯へたれば結婚せんことを求
むれども先方は承諾せざるを以て心憂き日を
送る内フト一策を案じ出し病と稱して一室に
閉ぢ籠り少年の許へ使を送りて面會したき旨
を云ひ込みたり少年は病と聞いて猶豫せず音
訪れけるに娘は之を見て尙ほ病苦に堪へざる
面色を爲し簡程までに戀ひ焦るゝなど掻き口
説く所を戸張の外に藏し置きたる寫眞師に撮

影せしめ其見本一枚を見せて幾枚注文すべき
やと云はしめたるに少年は始めて計られたる
を知り斯く油斷せし上からは如何に否めばと
て法律上夫婦たるを免れず所詮叶はぬ事を六
箇敷論立して名を汚すよりも穩便に結婚する
に若かずとて遂に伉儷の契を結ひたる由自由
結婚にも又不自由なるものあるか

◎怯を學ばず

戊辰の役若松城攻撃に際し東門最も堅く桐野
利秋之に向ふ一日戰甚だ急なり利秋已に戰死

を期す諸將之を察し頻りに促して其銳を避けしむ利秋聽かずして曰く危に臨みて退くは怯なり生て怯懦の笑を取らんより寧ろ死して芳名を垂れんのみと西郷隆盛之を開き遽に使を馳せ利秋に欺き報じて曰く南門の賊勢猛烈官軍將に潰ぬんとす宜しく赴き援ふべしと利秋報を得て人の危を見て救はざるは義にあらずと直に南門に赴き免るゝを得たりと

◎蛙の禪

詩人サインフオイクス氏は或る「ユードン」人に

二百「ツカードン」の金を借り清貧にして返済の道なきより長らく胡魔化し居しが或る日理髪店にて髭を剃らんと石鹼もて塗擦居たる時不意に彼の債鬼に責め付られ逃るゝ道もなく債鬼は上首尾なり機會なりとて即刻に返済せよと酷に責め立てたれば剃子も餘り氣の毒と思ひしか旦那が髭を剃らしやるまで待てあげなされとの仲裁にて債鬼は然らばそれまでは猶豫せんと諾ふたり其時詩人は「屹度子は髭を剃るまで待て呉れるな」といひつゝ剃子に向ひ「子

は證據人ぞ」といひ髭を剃らずに直様立て出で
行きしと

◎強姦家の失敗

徳島寺島本町にて女暮しをするおふでといふ
方の表戸をぞん／＼と叩いて案内をするもの
あるにおふでは誰人の夜更けて來りしかと不
審をしつゝ、表戸の締りを明けてはい殿誰拙者
は警察署より参りしが其方に尋問のとあれば
只今同行致せと突然けに云われしが何さま警
察署よりの御用といふに黙止がたく早速身繕

らひして男の跡に従ひつゝ、二三十間歩みしが
何となく男の素振が怪しき故機があれば試し
見んと心算たくらむ後ろより何所の人か知らねと此
方へ來る男のあれば是幸ひとおふでは先に立
て行く男に向ひ警察署と被仰おつしやりますがお役所
は何方らへ参りますか御覽の通りお呼び懸け
と聞て近所の人か後から附て來て呉れますか
らと早速の頓智に男は驚いたる體で「なに近所
の人が附て來るとな」といひつゝ、都合悪しと
思ひしか其儘何所へか逃げ去つたりと云ふが

察するに此男は先頃富田浦町にて二三軒同様の手段で娘を強姦たぐさまんと計畫たくみしものと同しくおふでを強姦たぐさまんために連れ出したものと思はるゝがおふでは頓智にて程よく危難を逃れたるものなり

◎還るは往なり

土州高知より佐川に至るの間に久兵衛坂といへる所あり當時現に新道工事中にて通行禁止の處なるが先日高知の商人神田某佐川行の折序に新道一見せんとて彼久兵衛坂を通行の處

番人見咎め何處へ行くぞと問ふ某氏急に體を後る向けに轉じ「はい高知へ行く者でござい升番人」此處は通行相成らぬ跡へ歸られよ某「はい」とて佐川に向ひて行き去れり

◎無いとは手管小供迄

太田蜀山人がまだ仕官し居たるれり兼てより好む道とて狂詩や狂歌を詠み同僚の者に分ち與へ肝腎なる役向の手に附かざる故重役おもむきの者は如此こゝろな事ではならじと譴責せしに予山人も以來は何人の頼みといへども決して狂詩狂歌

なぞを書て與へぬといふ誓書を認めて重役へ差出たり然るはとに三日ばかりも過ぎたる後御前より蜀山に書かせよとて與女中に帛紗よぐさを持せ來こされたる故重役は此度のみ許す故認められよと言へと蜀山はなか／＼承知せず然れど重役の者は上の仰せなれば是非認められよと言いつけば蜀山も然らばとて側わきにありし筆を採りつゝ件の帛紗を押おひろげ「以後は何人に頼みといへども狂詩狂歌などを認め申まさず」と前日の重役へ納めたる誓書の文句を左もいかめ

しく認て差出したりとぞ

◎ 争兒の斷訴

支那の某縣にて兩婦互に一孩兒を争ひ之を知縣に訴るものあり兩人の言皆な理あり知縣判する能はず乃ち之を夫人に謀る蓋し夫人は機敏にして時々巧に疑獄を判せしとありしを以てなり夫人知縣の言を聞き熟思すると暫時直に家奴に命じて小兒を抱き來り其衣服を剝はき去らしめ然る後庭池に畜たくひ在る一大鯉魚を生ながら取り來らしめ白布を以て緩く之を纏

ひ其上を被らしむるに小兒の衣服を以てし遂に兩婦を望み「詞訟決し難し相公命じて兒を河中に投せしむ」と叫ひ之を河中に捨てしむ鯉魚水を得て潑漉す小兒の水に苦むに似たり一婦之を見て狂呼し身を河中に投じて救はんとす夫人乃ち小兒を其婦に與へて而て他の婦を罰せしむと云ふ右はソロモン帝が兩婦の訴を決せしと相似たり

◎開て喫驚葛籠の蓋

昔支那の或家に新婦を迎へしが其夜家内の雜

間に乗じ一人の盜賊壁を穿ちて忍び入れり其壁内にはかねて大木の立寄ありしを賊は之を知らずして其木へ突當りしに如何なる機みか大木轉倒し賊は頭を打碎かれ其場に即死せり家内の者は其音を聞き何事にやと燈を照して之を見れば賊の所爲か壁を穿てり又傍らには流血淋漓たる一人の屍あり能く之を檢すればかねてより性質良からぬ隣家の主人なり一同大に驚き爲す所を知らず時に新婦竊に其夫に謂て曰く若し隣家へ此事を明かに報せば反て

怨恨を懷き後日仇をなさん若かず妻に一策ありと即ち僕をして一の葛籠を取出し賊の屍を入れ之を隣家の門前に置き言を發せず靜に戸を敲き其妻の出て來るを見て走り去らしめたり妻は戸を開き其葛籠を認め例の如く本夫の稼ぎ來りしものならんと思ひ之を内に運び置けり然るに數日を経るも歸り來らざれば心大に不審を起し彼葛籠を開き見れば何ぞ圖らん夫の死體あり喫驚仰天悲み叫び思慮百端亦之を如何ともなす能はず唯竊に其屍を埋めたり

といふ

◎棄た魚に金は不貫

去る明治十年の末頃花房義質君が公使として朝鮮に赴かれしときの乗艦高尾丸が漢江の入口なる所安渚といへる港に着きたる時二三艘の漁船が波を衝て漕ぎ來り唯今漁り立ての魚あり召されずやと口々に呼はるに同艦の通辨立出て其價を問べば一尾に付韓錢十一貫文なりといふそれは餘りに貴しもつと負けよといふ時彼の漁師等は抑も此艦は何國より來り

しやと問ふ橋頭に揚げたる日章の旗號を見知らずやといへば否知らずと答ふ知らせばいふて聞さんこれは汝等が王さまの處へれ使に參らるゝお方の乗られし日本の艦なるはといふに漁師どもは暫らく考がへたる體なりしが忽ち點首ちんすうてなる程この頃村の役人に聞たることあり今度日本の王さまと我國の王さまと兄弟になられしが扱はそのお使にてありつるか然らば御身さま達たちも餘の人にては無し謂はゞ我々ど一家の兄弟分なればこの鯛も懸直をせま

ぎり／＼に廉やすくしてまいらす可しとて俄に半分はと價を引下げたれば若干の魚を買取たり此時艦上より飲殼のひの洋酒の空瓶あきびんを幾箇ともなく海中へ投げ込みたるを彼等はこの徳利は拾ひてもよきやといふを欲ほくば皆持ち往けと答へたれば殊の外嬉うれし氣なる體にて船をもちこちに乗廻し波にたゞよひて流れ去る瓶を我がちちに拾ひ取る體の面白ければ我が水夫は興に入りて艙部屋くらぶの隅にころがり居る空瓶まで持ち來りて雨の如くに投げ込むに予いよ／＼遽

て騒ぎて潮の餘沫に濡るゝをも厭はせ大かた船中に取上げたるが只見る瓶と魚との山をなして人の居る處なきまでになりけり漁師既に拾ひ終りて通辨に向ひて懇ろに禮を述べ今日皆さまの御厚意にて思ひの外の徳つきたればこの鯛をなほも負けまいらすべく且つこゝに持て來りし魚をもれ禮として差上げたしといへばいやゝ汝等に無代貰ふては氣の毒なり價は以前の負けたる直にて買取るべし又其瓶は此方にて不用の品を棄たるなれば決し

て禮などを受くる謂はれなしとて強て錢を取らせ鯛を買ひて通辨は料理部屋に持ち往きたる隙に彼等は同艦の船階子の下なる格子板の上に鱸比目魚鰯鯖の類を堆高く積置き艦を操りて立ち歸るさまを見て艦中の人々はこれこれ此處に魚を置いて何とするぞ賣りたくば買てやらん錢を取らぬかと呼立てたるに漁師は打笑ひていやゝその魚は我々が其處へ棄たるなり不用にて棄たる品に錢を貰ふ謂はれなしとて其後は見かへりもせずさつゝと陸をさ

して漕ぎ去りけるとぞ抑も此漁師は屈原と汨羅に語りし漁父の類にはあらざるべけれど又東江に楚竹を燃す漁翁の儔とやいふべからんかこれを見ても彼の國風の朴訥にして仁に近きを推て知る可し

◎ 晝鷺は居ざりし乎

昔鶴賀より富士松の一派を起せし若吉が本所の小笠原邸近傍の或る寄席に掛り晝席にて新内の勢力を語り「慾々熊鷹」といひさし「夜鷹め犬め畜生め」といはんとせしが心付き其頃該所は

夜鷹(姦賣女)の群居せし所故座中を見渡せしに折悪敷聽人の内に夥多の夜たかを見受し故忽ち語を替へ「鷺め犬め畜生め」と語りし故一座の者其頓智に感せしと

◎ 筍の死骸

一休和尚蜷川村の庵にありし時郷士蜷川新左衛門と無二の親友たり其家又隣にあり而して一休の庵は竹林を以て圍ひ新左衛門は侍なれば嚴重に塀を作れり時に三四月筍の頃に至り塀を潜りて新左衛門の庭中に大なるもの二本

を生せり新左謂へらく和尚も一と通ならぬ奇人ならば尋常にして堀り取りなば必ず掛合をなして我れの地内なる竹根より生じたるものなれば宜しく其元に返すべしなといはれんと臆て太刀を提げて庭に下り笥に向ひ其方は武士たる者の庭内に無断にて飛込む無禮者め主人只今手討に致すと彼の二本を切り取れり一休之を聞き追は新左能く計れり然し我れ彼を驚かし吳んど衣を着し珠數をつまぐり案内を以て新左衛門に面會し只今罪人御手討になり

し由最と不憫に存じ候まゝ役目に任せ死骸は此出家に渡し下され度といへば新衛門口惜ながら其理に服し笥を一体に渡し後は大笑ひになりしと

◎ 椀が變れば

盲者めくらと啞者おとしと聾者いびりと三人同じき家に住めり一日其隣家より火事起りたり尋常の人にてすら驚くなれば三人の不具者は嘸かし遽あせ狼おぼことならんと人々は駈付けたり然るに三人は少しも驚かず盲者は杖をつきて先きに立ち啞者は其

跡につき覺者は啞者の肩に乗りて盲人に其進
むべき方向を教へたり斯くして三人は大勢の
人々の逃げ迷ふ中を安々と立のきたり

◎叱言もでんく

御恩も曉らず主人のことを兎角口さがなく云
ふが奴僕の常茲に一人の奴僕日も暮れ果て職
業を了へて己が部屋にあり例の悪口をする様
「アノ主人の面悪さいつも人をば牛馬の如く使
役して……と云ひ掛けしが噂をすれば影とや
ら何時の間にか主人は入口に立居たるをチラ

と視てコハ誤てりとは思へども其罪又重から
んことを思ひ視て視ぬ振り益々口調を高くしと
はマ一酷い胴慾な撃殺さでは置かるまい……
と是より淨瑠璃体に「と一筋に思ひ凝り悪か善
かも覺り得る只一心に愚昧漢は……主人ハ、ア
此奴芝居の真似をヤツテ居るな

◎母ア頓智歎

深川區安宅町の中等以上の士族と見ゆる某家
で犬も御免を蒙るといふ夫婦喧嘩を押始めド
クハタの大立廻りをやらかしたり元來此家の

夫婦は一向夫婦の様な情合が見ぬ筈の上
 下しにも小せり合をするに云ふ塩梅で時に依
 ると随分大立廻りをするにとも度々なる故近
 所の者も常のこととして別段留めにも往く人
 なく去れば水入らずの夫婦喧嘩で一入餘興あ
 りと思ふでもあるまいが斯様な夫婦中にも玉
 の様な男の子が出来たるこそ可笑くも目出度
 けれ他と断じはさて置き昨朝は常になき大喧
 嘩にて内儀は亭主の翠丸を握り亭主は内儀さ
 んの髪の毛を掴み引つ引摺られつ必死の戦争

亭主は今にも絶え入る計りヒ〜いふのを
 サア野郎デマハタすると命がないぞと力一ば
 い握りつめるを國亂れて忠臣出で家貧くして
 孝子出で賄賂事件に證人出で虚言を並べて偽
 證出で籤をついて大蛇出で芋を喰てれ屁出
 でど慥かに青表紙に書て無い通り夫婦喧嘩に
 頓智出でたり今や夫婦は命の取り遣りヒ〜ヒ
 ーと叫ぶを老母は見兼ねて裏口へ出るより早
 く徳さん(隣家の若者の名)早く来て助けてね呉
 れよ國(孫の名)が井戸へ落ちましたよ早く助け

てね呉れよーと一聲高く叫びたれば内儀は憎くも兒が可愛さ握りし翠丸打忘れて井戸端へ駈付たる後より亭主も起き上り痛さも忘れて出で見れば國太郎は外より歸り爺ちやん喧嘩は濟だかい「夫婦は老母の願を見てね母さん面目がありません」老母曰く喧嘩をまたくなつたら此兒の出産た時を思へ

◎當り矢

駿遠參地方にては風を揚げ遊ぶの風盛んにして其風の大なること大判五十枚以上のものあり

り或日一個の大風を揚げ居りしに其系切れて切端は大樹の梢に搦み付きたれば風は依然大空に揚り居て落ち來るべき様もなく風の止むを待つ外はなかりけり折柄通り合はせしは一人の弓手なり其と見て忽ち胸に浮ぶ一計矢筈に長き糸を縛り付け天空に向つて満月に引絞る兵と放ちければ其矢思ひし如く風の糸の上を越へて地に落ちたり依りて其糸の兩端を合せて徐々と引き寄て漸くに風の糸に取付くことを得たりとぞ

◎老能制壯

昔一少年江戸に赴く老人あつて京師に歸る途中にて相遇ふ而して各驛馬に乘れり二人の馬奴俱に請ふて曰く願くは二君馬を換へん然らば吾等二人俱に便を得ると少年は首肯して下る老人肯かずして曰く吾行速かなりと之を驅馳す少年怒りて曰く汝辭せずして去るは予を弱となすかと刀を執り呼びて曰く止まれと老人反顧し下りて之を待つ少年氣を盛にし謂つて曰く予汝と俱に死せんと老人神色泰然として

少年を熟視して曰く來れ吾卿に語らんと少年色少しく解け曰く何ぞや老人曰く吾に一男あり齡卿と比し血氣も亦卿の比なり江戸に祗役する毎に予必諄々と戒めて曰く五十三驛行人の衆輿馬の多惶々般々日夜行絶へず汝一朝の怒りに君親を忘るゝ勿れと意ふに卿亦親あらば則ち猶斯のこどさなり卿それ之を思はざるかど乃ち乗りて去れり少年茫然たること久くして曰く偉人なる哉と後ち人に謂つて曰く予今日生きて君親に事ふるは是彼翁の力なりと

◎冷しいのが數寄屋

昔し某侯の家臣に小川永基と云へる者あり或日侯は湯殿に這入て御側の者共數寄屋の單衣を差上し處是では熱し最と冷しいのを持どの仰に皆々當惑し如何にして宜らんと思ひ居る處へ恰もよし永基の來りてければ殿がれ湯を召されし故數寄屋の單衣を差上げしに是では熱い最と冷しいのをと云はれしが之より冷しいものはなし何か好工夫はないかと云へば永基其は數寄屋の染が紺でありし故殿は焼いと

仰せられしならん白と藍で染し者を持て行なさいと云れ成程そうかと直様之を進せしに其をば召させられたり

◎關路の黃門

伊達政宗或時參内に及びしに公家より奥州白川の關を問ふて關路の雪は如何にとあるを政宗は

さらぬだに誰かは越ねし逢阪の

關埋もれて夜半の白雪

と即詠せし故三位に叙せらる人呼んで關路の

黄門と云ふとかや

◎蚌鷸の闘ひ漁夫の利

二人の童子が嘗て樹下に散歩せし時一個の胡桃が樹上より落つるを見て一人の童子が早くもこれを拾ひ取りしがば他の童子怒り云ふ其れは予の物なり何となれば予は汝より先きに胡桃の落ちしを見ればなりと他の童子之を打消し否なこれは余の所有に相違なし何となれば余は汝より先きに之を拾ひたればなりと斯く紛紜争ふ際に稍年長けたる一童之を聞付け

汝等何の爲めに争論するかと二童之を告ぐ時に其童の曰く先づ其胡桃を僕に渡せ僕は汝等の爲めに喧嘩の仲裁をなさんと乃ち其胡桃を割き殻の一半を一人の童子に與へ此は汝の分なり何となれば汝は殻の落つるを見ればなり又一半を他の童子に與へ此は汝の分なり何となれば汝は胡桃を拾へばなりと云ひ終り自ら其實を取り己れの口へ入れ是は僕の物なり何となれば僕は胡桃の殻を割くの勞に當りし故なり

◎春章一畫價值千金

勝川春章は天明年中有名の畫工(東都似顔繪の元祖)にして豊國と並べ稱せられしが一年の春札差某の家へ年禮に行き酒肴の馳走になりし時某の云ふ様先頃より願申せし金屏風今日御來臨こそ幸ひ是非れ畫き下されと云はれ春章も辭み難く墨を磨らせ有合したる并鉢に入れ筆を揮はんとする時家内の者取圍みて見物せしに此家の三歳計りなる小兒が何心なく傍に置きし并鉢を蹴返して金屏風の上を遠慮な

く歩行たり居合せたる人々はコハ如何せんと叫驚く中にも主人の某は折角張せたる金屏風なり殊には先達てより執畫を懇望して漸く今日畫せんとしたるも果さざる口惜さよと失望せしを春章は一向頓着なく筆を執りスラ〜と小兒の足跡を其儘に萬歳が新年の屠蘇酒に酔ひて溝へ落とし様を畫きたれば一座は其即智に驚きしと

◎古ユングセラウ

天明の頃日野川の堤防破壊して其水留に困難

せしが水留人夫の内の某なる者、抜ん出て曰く、堤防破壊の日より既に數十日を経過す而して未だ水留らず如此にして幾日を費やすも到底堰留むること能はず今一策あり他にあらず、松杭數百本を買調へ又昆布數十貫を買入れ、該切所の松杭を打立て之れに昆布を巻き付けにして、昆布に水に浸りしを以て漸時にして水留りしことありと老人の口碑なり。

◎長安近歟日近歟

在昔肥後は大智と名くる禪師あり、歳八九の時

寒巖和尚の徒弟となる初め大智を携へ寒巖の許に來りて曰く吾兒謂ふに非凡なる所あり若し和尚の徒弟と爲るを得て教ふる所あらば吾家の幸なり和尚諾して曰く汝年少にして非凡の智ありと爾後宜しく小智と名くべし大智直に答て曰く小智は大智たるに妨げあり乞ふ宜しく大智と命せらるべしと和尚其言を善とし此名を命ずといふ一日寒巖大智をして使せしむ大智犬を恐る寒巖携ふる所の杖を授く大智携へて出づ杖長うして大智の頭を出づること

過半、寒巖背後より戯れて曰く大智杖を携ふる
か杖大智を携ふるかど大智直に歸り來り杖を
以て寒巖の禿顛を打て曰く大智和尚を打ちし
か杖和尚を打ちしかど和尚益々以て智とす

◎遊治郎無錢遊興した後は

或時細川幽齋が紹巴と秀吉公の御前にありし
に公は「立つもたゝれず居るもゐられず」といふ
一句を出して能き附句ありやと仰せありけれ
ば紹巴

足のうら尻の尖りにももの出來て

と此時幽齋申上ぐるやう紹巴が句は理屈にて
風雅なく候と公然らば幽齋仕候へと仰せあり
ければ

羽ぬけ鳥弦なき弓にねどろきて

と付けられたり又一句出すべしとて

丸う四角に長ふみぢこふ

と仰せられしに紹巴

丸盆に豆腐を入れて行くちんば

又々幽齋如何と仰せあり前の如く申上げらる
去らば其方仕候へとありければ

筒井筒月つりあげる箱つるべ
と付けられたりとぞ

◎頓智活眼を醫す

福岡縣下穗波郡大分村大谷某の宅に或る夜村の若者輩三四名遊びに來り四方八方の話の折から一人の若者が聞けば頃日博多川端町に義眼發明醫高橋さんとやら云ふ人が滯留し片眼の別嬪や色男に二圓五十錢にて義眼療治をされ居るとのとなるが其手際の巧みなるは自動の工合、彼是恰も活眼の如く片眼のね嬪さんも

瞬間に雙眼以て秋波を遣ふに足るとは實に驚入た發明の療治と左も感歎するに主人の某氏は成る程其義眼醫師滯留のとは福岡日々新聞の廣告に記載であつたが併し義眼なるものは只面部の粧飾り物までにて萬物を視射ことは到底出來ぬものなればなんぼ巧みに療治すとも左程不思議の施術とは云れず夫より此近所に全く見へない眼球を上手に療治し得る人あり一度此治療を受けば自分の保養次第にては何でも蚊でも見へぬと云ふはなく而して終身

毀れる心配も修繕するの勞もなく是予不可思議千萬と云ふ療法なりと誠しやかに説出したるを三四名の若者等は異口同音に斯る名醫が何村にありますか私等は今日まで左様な上手の醫者どんが近村にあるを聞かずと疑ふを主人は莞爾と笑てあるともく其眼醫者は當村の尋常小學校教員横田さんなり同氏に依頼せば一丁字も見へない眼球も忽ち官令や新聞紙が見ゆる眼球となると請合なりと云はれ若者等は呆然たりしが此の頓智の一針には大に感

覺したる模様ありしとは某氏一言の頓智は明
盲目の眼蒙を啓くの手術と云ふ可し

◎ 賸物に非ず

廣袖の日本人が俄に窄袖を着くるとになりてより種々の不都合も多く随分世間には留針の積りか襟飾りに釦杯を付くるものありて笑ひの種となりしと杯もありしが茲に甚だ絶倒の話しと云ふは某紳士が襟飾に而かも昔し流行つた下駄表の鉾を付けてありしが或る人は可笑しくもあり又は何か意味のあることもやと

思ひ其譯を聞いて見ると紳士は平氣な顔して「否此は銚でありません全く留針です何故と云ふに銚の唐音切しはびんでありませんかど果は一笑になりしと

◎角力壯士

大阪國事犯者中に於て黒旋風の綽名を得強力無雙の聞えあるのみか訟廷に於て磯山清兵衛氏を毆打し一層勇名を轟かしたる氏家直國氏は大阪北區天満橋二丁目菅野道親氏方に寄留して今尙北警察署の特別監視中なるが驍然悟

る所ありてか力士と成て日下開山の名を得んことを思ひ立ち俠客小林佐兵衛に逢て其志を遂んど或日佐兵衛に面會して之を謀りしに佐兵衛は快く之を承諾ひ時機を窺ひて關取等と引合さんとを約せしが昨今は：角力取ならふや秋のから錦：例年の大角力興行前にて本年は東京方と合併のことさへあれば小林の宅に頭取關取寄合して種々協議することあるを幸ひ氏家氏を招くに氏は喜び勇んで早天より小林方に來り頭取關取等に面會の上同家の裏手

に設けある角力稽古場に在いて押尾川内の關
取梅櫻と勝負を試み大に頭取等の望を得たり
扱今度押尾川内稽古場にて稽古することを約
したるが此日頭取中にて同氏の名乗りを何と
附けて宜しからんと假りに評議せしが小林は
例の頓智能く國事山としたらば好からんと言
出でしに夫こそ同氏の名乗に適當なれとて一
同手を柏きて賛成の意を表したりとか

◎左右共に全し

嘗て土耳其に於て法律家と軍人と相高よりて

譲らず相遇へば即ち争鬪す白晝血を街上に流
すこと屢々なり帝之を憂ひ両者を調停せんと
欲す或日一堂に會することあり乃ち曰く今よ
り以後軍人は左を以て貴しとし法律家は右を
以て貴しとすべしと兩者相遇ふも各々上位に
在りとなし以て自得す是に於て争鬪始めて息
みしといふ

◎虎にも亦氣ある乎

津田休甫年弱冠なりし時備前の浮田秀家に仕
へ國亡びて後剃髮して伊豆の國の海濱に寓し

専ら俳諧連歌を事とし或は琴瑟書畫を弄びて諸國を漫遊す一日大阪天満の粟東寺に詣りしに寺僧喜び迎へて其新造の戸に畫かんとを乞けるゆる直に筆を揮ひて大虎を畫きたり休甫が去りて後ち寺僧熟々其虎を見るに何となく尋常のものに異なるを覺ゆ數日にして漸く其處に鬚なきを見出しける幾程なく休甫再び來りければ寺僧は言辭せはしく其畫の故を問ひしに休甫は驚く體にて曰く當日匆卒筆を走らせしものから其鬚を忘れたるなりとて直に筆

を執り其虎の傍に就きて一個の毛板を畫きたりと予若しさらばとて鬚若干を添へたらんには事すむべかりしを休甫が飄逸なる此滑稽の畫を爲して遂に奇話を藝林に留むるに至れり

◎來高去低

夜中途上にて提燈遠く見ゆるに此方へ來るや又は彼方へ去るやを知るは一寸知り難きとなれども正立して手を目に當て指間より暫時之を諦視すれば容易に其去來を知るを得るなり何となれば此方へ來る者は次第に高く見ゆる向

ふへ去る者は段々低く見ゆるものなればなり
此事小なりと雖も亦以て大處に用ゆべきなり

◎二國の語を解する鸚鵡

佛國巴里に一鳥商あり二國の語を解する鸚鵡
ありと廣告せしに一紳士行て之を買はんとし
問ふて「紳士何國の語を解しますか鳥商」左様で
御坐ります佛蘭士の語を能く解します紳士「今
一國の語は鳥商」渠れ自國固有の語で御坐りま
す

◎破器と詫をさせる

或大家に日々下婢等の鹿相よりして器物の損
すること多く之を叱責すれば後には其犯人も
互に譲り合ふに至る其家の主人或時妻の之を
叱することを止めしめ下婢等に令して曰く明
日より誤つて器物を毀損したるものは予の起
きて臺所へ顔洗ひに出る時其破損したる器物
を前に置き一禮すれば可なり敢て之を督責せ
ず又之を償ふに及ばずと温言以て之を示せば
皆感謝して退く翌日より主人出で來れば皆損
器を前に出し恭禮す主人敢て咎めず只之を黙

視するのみ他の朋輩之を日笑す過つ者大に恥
 ぢて日々に減じ終には過失者なきに至りしと
 いふ

◎南無阿彌陀佛

初鹿野傳左衛門は徳川氏の旗下にて目付役を
 勤む此人城中城外市街を往來するにも諸役人
 に彈からるゝと甚だし其故如何となれば此人
 仕官の初より帳簿を懷中し人に逢ふ毎に何事
 によらず或は對話中と雖も幾度となく帳簿を
 懷中より出し何か記載するを常とせり人々之

を恐れ品行正しく職務に私曲なく故に此人奉
 職中は犯罪の者少しと此人死に臨みて遺言し
 て數百冊の帳簿を出し之を是の儘幕府に獻じ
 閱覽に備へ奉り其上香花院に贈るべしと諸子
 遺言の如くす幕府之を納れ席を設け滿城の諸
 官吏不殘列席にて之を開封せんとす此時諸官
 吏此を開封せば如何なる事かあらん定めて驚
 くべき事もあらんと皆々手に汗を握りて控へ
 たりヤガて開封閲讀するにコハッモ數百冊の
 帳簿徹頭徹尾南無阿彌陀佛の細字のみにて他

の字一もなし時に立合ふ諸官吏ホツと一息の
き思はずひとしく南無阿彌陀佛と稱へ其徳化
に伏せり

◎ソウ旨くは

延喜帝の時僧寛蓮なるもの碁を能くす數々宮
に召されて對手を勤む帝の技及ばざること二
目。常に賭するに金枕を以てす蓮勝てば即ち其
枕を賜ふ而して其出づるを待ち諸郎に之を追
ひ奪はしめ以て戯となす此の如きこと數々な
り一日蓮復た勝ち賜を受けて走り出づ左右追

ふこと例の如し蓮即ち之を其懐に取り宮井に
投して去る追ふもの還り翌日に至り人をして
井に入りて之を出さしむれば何ぞ圖らん木質
金箔を塗るものにして蓮は終に眞物を得たり

◎ケンセキを恐る

英國の田舎に説教者あり設教せんとて出掛け
しが不圖一農家を見れば豫て相識の農何某打
菱れて立ち居たり其仔細を問ふに昨夜斧一挺
を盗まれしが其なくば薪もとれず最と困難せ
りと説教者斯く聞きて「よし」余と共に會堂

に來られよ其盜人を穿鑿して進すべし」と何某を同行せしが彌會堂に入らんとする時拳大の石を拾ひて入りし諸講壇へ上りわざ／＼其石を衆人に見ゆるやう高き所に置き良心といふ題にて講せしが時分を謀り俄に彼石を右手に取上げ忽ち大聲に喚びていふよう「昨夜何某氏の斧を盗みし者あり若し白狀して罪を設びざるに於ては此石を打付くべし」と數多の聽講者中一人雙手を以て頭を抱へたる者あり説教者容易其盜人を發見し斧を其所有主に返さし

めたり

◎ 一步はれるか三萬舎

肥後國山鹿郡山鹿町にて湯祭の執行ありし節書ど面白き話あり元來山鹿は温泉の場所がらと云ひ人の往來も多ければ自然と風俗の卑猥なることは勿論祭りなどの砌りお梅さんね龜さん八助やん喜藏やんと若き男女の春をゝろ互に引つ引れつ居たる其中に人目を包む頬冠り賑合ふ町を歩みくる一人の別嬪を横抱に抱きつゝ町裏の畑畔までかゝへ來り一息つひて

欣びながら頰冠りを解きたれば彼の娘は仰天して兄さん何事遊ばすかと云はれて兄はびくともせず是れ妹よ兄の力量は今の通りと云捨て其場を立去りしとは随分頓智の粹と云ふべし

◎天文學を知るか

中井竹山或時近國に行き歸途籠に乗り急ぎ歸る途中偶々大雷に遇ひ轎夫怖れて轎を路上に置き傍なる農家に走る竹山家中より大聲して曰く吾は大阪の學者中井竹山なり此雷決して

震死すべき憂なきを知る汝等早く行けと轎夫竹山の名を聞き悦び急ぎ籠を昇き歸りしと云ふ

◎君も僕も

菅茶山は平素節儉の人にて常に垢つきたる白の羽織を着す諸侯の來り面するも其儘出て迎會す山陽先生或時訪ふて戯に

我見ても久しくなりぬ白羽織

茶山聲に應して

君が被は幾代經ぬらん

◎可愛そふ

◎難波二郎曾て某貴顯と馬關に在りて或る酒樓に登る歌妓數名來りて興を佐く中に容色卓絶なるものあり貴顯私語して君に謀る君諾して其妓を一室に招き巧言意を通ず而して妓應せず君困却して席に歸り貴顯に低聲して曰く公注意せよ彼れ癩毒ありと貴顯頭を搔て曰くいつと止そふ」と

◎國家の大石

元祿の頃赤穂の義士高家に亂入して目さす敵

を間十次郎が鎗もて突き留めたるを武林只七駈けつけて太刀もて斬り伏せたり。さて互に首を取らんとして争論に及び既に刃傷にも及ばんとするを大石良雄の計らひにて十次郎に止めをさへせ只七に首打たせれば双方遺恨なかりしと昔大江朝綱と小野道風と互に手跡を論争して止まず。主上の御前にて決せんと持ち出せしを敎して朝綱の書の劣ること道風の學才の朝綱に劣るか如しと宣ひしと。今古文武一對の美談と云ふべし

◎鶯宿梅
天曆の御時清涼殿の御前の梅樹枯れたりしかば其代りになるべき樹を求めさせ給ひしに西の京に色濃く咲きたる樹の有りしを堀り取らせ給ひけるに彼家の主の女其梅樹に之を結び付て参らせ給へどて何か書きたるものを羞出しければ人々仔細ある事にやと思ひて彼結ひ付けたる物を帝の御前に備へけるを敏覽在せしに

勅なればいとも畏し鶯の

宿はと問は、如何答へん
と書附けたりければ怪しく思召れて何者の家かと尋ねさせ給ふに紀貫之の女の住家なりと申しければ帝大に其風雅を愛でさせ給ひ彼梅樹を返し遣はされしとぞ
◎不平九郎なるべし
市川柏筵いまだ年若の顔見世に山中平九郎は坊門の宰相の役柏筵は篠塚の役にて大福帳とやらんを引合ふ狂言有りしが柏筵はしがよりより出で舞臺の平九郎と立合ひ大福帳を引合

ふに見物の者平九郎のみを見て其上手を賞賛し相筵と云ふものなく我心にも平九郎にのまゝるゝ様に覺ければ色々と工夫して着たる大紋を尙一層大きく拵へはしが、よりより出るやいなや足早に右大紋の袖を平九郎か面へ打かふせ例の通り白眼ければ見物一同にドツと相筵を稱美しけるとなり

◎天の窟戸より手力雄

今より三十年以前の事なるが讚岐寒川郡長尾村の風として他村より嫁入のもの當村を通行

する時は壯年輩道に要して冷評罵詈するの惡弊あり。時の庄官山下伴藏氏之を憂ひ何卒之を矯めんと思ひ居たるが恰もよし氏の親族筒井某の娘同郡宮西村豪農富岡某と結婚の約整ひ道を當村に取ることなれば壯年共は大に悦び名にし負ふ大家の娘なれば十分輿を要し見んと其日の至を待居たり。氏は此時一計を案じ縁女は未明に富岡方へ乗込ませやがて定め時刻にもなりたれば行列美々敷長尾村に差掛る壯年共は兼て期したることなれば多人數打ち

集り乗物を取巻き動かさず何卒對面せられた
 しと申込たり。附添人對面叶ひ難しと謝絶する
 も聞入れず去れば致し方なし對面取計るべし
 然れ共筒井氏は當村庄官山下氏と縁者なれば
 禮を以てせらるべしと輿の正面へ悉く坐せし
 め輿の戸を開くや美人と思ひの外庄官山下氏
 なれば一同呆れて言葉も出でず只々平伏する
 のみ山下氏は速に輿を通すべしと無事に婚儀
 も果て歸宅の後輿を要せしものを召喚し悉く
 所藏（村人を拘留する處）へ押込め夫より今迄の惡弊頓に

止みしどなん

◎御体操

体操教師得意に説て曰く体操程世に大切なる
 ものは有りません。体操をせぬ小兒は皆青ざめ
 て天死するが常ですと云へば。一人の生徒。先生
 昔の人は体操をしたものはありません夫れで
 も……と云ひかけると。教師はぬからぬ顔して
 昔の人は皆死に亡せて一人も残て居るものが
 ないのです

◎雷の初音

會て朽木縣議員田中正造氏は議場に於て議長
と呼ぶこと數回、發言の許しを得ず終に大喝し
て曰く議長は如何の順序により發言を許すや
と議長中島氏平氣なる顔色にて空を仰ぎ耳に
て聞き留めたる者を先にすと

◎悪口をいれしみず

むかし紫式部あるとき夫宣孝の他出せられし
れり鯛をあぶり食したるを宣孝かへりて之を
見いやしみ笑ひければ式部はとりあへず

日のもとにはやらせたまふいれしみづ(岩清水)

まいらぬ人はあらじとぞ思ふ

と答へたれば宣孝も其儘にうち捨て置かれし
と云ふ

◎頓智湯

或る家の隠居さんは殊の外意地悪るで家内の
ものが何を拵らへても怪我にも譽めたことの
なき人で有升が一日丁稚の長松へ据へ風呂を
焚かせましたが暫くして加減上等を見ますし
隠居へ其事を告げしかば隠居は例の濁聲にて、
湯加減は上等であるうのふと云ひました長松

ははらねいであ上等と答ふる時は又不足を言はるゝに相違なしと一策を考へ答へました、ハ
イ湯加減は温る好きには熱く熱い好きには温るうムります、流石の隠居も……

◎七を投げて閉口

嘗て一老人あり頗る機智に富めり彼れ今年九十八歳身体甚だ壯健なりしも不幸にして流行感冒に襲はれ最早起つ可らざるに至れり彼れ病中醫師に謂て曰く願くは我をして壯健ならしめよと醫師曰く我れは汝を再び青年に歸へ

す能はず如何んして可ならんか老人答へて曰く余は再び青年に歸るを望まざるなり只汝能く我をして老を保たしめよと

◎即座のさい智

小野木縫殿助言郷は細川幽齋の門人にして丹州福知山の城主なり始めは小身者にて年若の頃より歌を好み或日歌の會を己年が家にて開きぬ程なく歌初まりて食時分に至りハかば下婢と覺しき者今日の御客來に饗應すべき品なし如何計ひ申さんやと其の時妻女も亦筵に

侍りければとりあへず左の歌を書きて出され
けり

月さへも漏る宿なれば春雨の

ふるまい物もなかりけるかな

とや、有りて黒く焼きたる餅を反古につゝみ
杉楊枝を添へて引かれしとぞ

◎野田二平氏の畧傳

遠江國濱松の藩士に野田二平と云へる奇士あり
一ト年元旦某の家へ年玉の禮物を贈るに藁
の心(方言ゴトと云)を以てす。使者之を笑ふ。氏曰

く汝知らずや之れ煙管の穴を掃除するの用ふ
供すと。

松葉の墜ちたるを集めて賣るものあり。氏故ら
に門を半開かして之を召び入る。松葉賣内に入
らんと欲すれば門狭きゆへ左に突き右に當り
松葉の夥しく墜つるを見て賣るべからざるの
安價を以て買はんと云ふ。松葉賣怒りて去る門
を出つるに當て又幾多の葉を落す氏笑て曰く
我計妙なりと悉く墜葉を集めて竈下に供せり
と。

嘗て用事ありて旅行せし時足勞れたれば茶店に憩ひ僅少の菓子を求め食せずして去る途に農家の午飯を喫するを見て突如入り茶一杯を乞ひ傍に小兒の戯るゝに先きの菓子を出して與へ腰より辨當取出して之を食す農家小兒の菓子を貰ふを徳として只茶を與ふるのみならず香の物を出し又別に菓を贈れりとす。維新の際藩主井上河内守國替となり上總に赴くや氏も亦た從中に在り自家を引き渡すに當り家中を掃除し障子を張り替へ床には花毬に

花を活け手桶に水迄を汲み替へ萬事引渡の禮を盡せしかば人初めて氏の常人に異なる只奇を好むのみに非るを知る。

◎一本の筆新聞屋を賑す

一生徒新聞紙を読み驚て曰く氷は其厚さ僅二寸に至れば能く人を支ふべしと果して然るかど云へば傍に居し一人微笑して曰く此等の事何ぞ敢て奇とするに足らん見よ暑中に至れば一塊の氷能く氷店の一族を支ふるに非ずやと

◎商人のみならず

或商人宗匠に心得となるべき事を問ふたれば
團扇に

何事も扇にやるはそんのもと

丸く團扇にやるがかんじん

◎身を知る雨

坦巷江川太郎左衛門氏初め砲術を高島秋帆先生に學ぶも其技は早く出藍の名あり一日門下の人氏に謂つて曰く先生初め其術を高嶋先生に學ぶと雖ども爾後追々改良する所ありて以て今日の妙技を得故に今日より高島流を改め

て江川流と稱する如何と氏叱して曰く汝が師は抑も何人の弟子なりやと門生乃ち黙す先是高島秋帆に勤王の志し深し故に姦人の讒に陥りて逮捕せらる而して秋帆の捕に就くや秋帆自から其何の故たるを知らざるなり時に江川氏葦山に在り之を聞き密に共事由を書し別に金拾兩を包み齋藤彌九郎に密付して曰く卿今夜原若くは吉原に宿し驛吏に謀りて以て此二件を秋帆先生に致せ二驛は我管下なれば法嚴なるも或は近づくことを得んと彌九郎直ち

に原に赴く至れば一行已に過く即ち追ふて函
 嶺に及ぶ監護極めて嚴なり復策の施すべきな
 し尾して大森に至る暴風雨俄かに至り衛卒倉
 皇茶店に入り雨を避く彌九郎機を得雨を避く
 る爲して馳せて輿に近づき仆れながら翰と
 包とを輿窓に投ず衛卒馳來り彌九郎を叱責す
 彌九郎泥土のため仆れたるを陳し他なきを示
 す警吏も亦深く詰らずして止む秋帆因りて事
 實を密にすることを得また其金を獄吏に贈り
 爲めに侮辱を免かれたりと云ふ

◎居候か置き候が

昔三十間堀邊に住居せし豪家の材木商に表徳
 太申和泉屋甚助と云へる者あり専ら虚名をう
 らん爲め夥多の金を遣ひたる呆け者なりし或
 時知人の醫者を招きて頼には爾來月々扶持米
 を送りやる故何卒門の表札に太申内何某と書
 くれよといへば此醫者心得て太申内の三字を
 篆字にかき己が名斗楷書にて書て出せしどろ

◎晝問の夜鷹すき

或る薪木賣の翁綿入の上に麻の半天を着市中

を賣あるくを見て。物數寄の一人薪木賣に向ひ

「夏冬が一時に來たか其着物」

この人片目なれば薪賣取敢へず

「夜晝が一時に來たか旦那様」

と之より懇意になりしとなむ

◎一石橋下二本橋

嬉遊笑覽に内雄長老の句に「白川隣黒谷の紫野
近丹波」小僧參北野。大佛在南都。「櫻東山
地主。梅北野天神」などあり。昔時新井白石「五百
羅漢渡川則是一千影」と書して田鶴樓に示し

ければ、鶴樓直ちに筆を取て、「丈六彌陀越山纒
見八尺光」と書きたり。白石、「後素庭前月」と書
して出せば鶴樓「奪紅日下霞」と付けたり、白石
「駒引錢」といひければ鶴樓「虫嚙米」と「青葉紅
葉」といふに「細根大根」と答へたり、又「山猫傀儡
師」といふに好き對ありやと尋られしに「海鼠」
と聲に應じて答へしとなり。彼の東坡居士が「三
光日月星といふ句に「四時風雅頌と付けたりし
にも譲らざるべし

◎よく精察す

戸田山城守御老中にて、龍の口やしきに御住居、
此時庭を作らるゝとて、車にて石をひかれ、前の
揚場にて、車力大石をわつかひかね取落し、制札
をくじく是よりさはぎ立、辻番所よりも立合、其
車力をとゞめ置れ、かれ是やかましくなりける
まゝ、山城守殿御屋敷より御城へ早く此段つげ
れば、山城守早速同席列座にて、御徒目付をよ
ばれ、身が屋敷前へ石を車にてひかせしが、制札
へさはりくぢけ候よし、是は最早多年の事故、根
朽候ての事と存候、早々見分致し、朽候は、直に

取替候様に可申付也、もしいまだ朽不申候て
の事に候は、車方共申付かたも可有之、しか
しなから公儀制札の事故、わざと車ひさかけ候
事は有まじ、大石を車よりねろし候、ひびきにて
多年のくされ、たもちがたく折候事と存られ候、
よく見分致べく旨申渡されしゆへ、同席の
衆も尤ど同せられしとなり、早速見分の御徒目
付歸りなる程根朽候故、ひびきにて折れ申候と
申す、しからは新に建直さすべしとて、御右筆方
へ被仰付しとなり、此制札餘り古くもなき様な

れども、不朽といはゞ事六つかしかるべしとて
◎ワウ生したか

埃及王へブリューの産婆なるシブラ、プワの二人
に諭して云けるは汝等へブリューの婦女の爲め
に收生をなす時に床の上を見て其兒男子なら
ば之を殺せ女子ならば生し置く可しと然るに
産婆王命の如何にも爲すに忍びずして男子を
も生しおけり埃及王産婆を召して之に云ひけ
るは汝等何ぞ王命に従はざるやと産婆即ち答
ふるやうへブリューの婦は埃及の婦の如くなら

ず彼等は健くして産婆の彼等の家に到らざる
前に産し終ると王詰る能はず

◎大より小に及ぶ

家光の時世上盜賊多くして折柄盜賊の棟梁め
し囚はる其名を問へば大草履組と申す其所以
を問へば草履の花緒を大きくして口じると
する由申ければ其由言上致しけるに公は定め
て小草履組と申す盜人あるべし大といへば小
といふものあるべき理なり其由再吟味に及び
ければ果して小草履組といひて常の草履より

小さく足の半に至らざる者を穿ちて合圖となす由白狀しければ大草履組のものを目明しとして小草履組を捕へられけるとか

◎能く下を憐む

舊幕の頃とか某河に殺生禁斷の場所あり制札に曰く某所より某橋下に至る迄の間に於て魚を漁する者あらば罪死に至ると時に一人あり禁を犯して吏の捕る所となり遂に白洲に引出されて宣告あるとき時の奉行某は其宣告文の中某橋下に於て云々ぞあるを某橋しもに於て

と讀誤りつゝ、コリヤ〜某橋よりしもに於て漁するは御上の御法度の外じやツとて遂に罪を問はざりけり是は其者が文字を知らざりしを不慥に思はれての事なりしよし

◎登り詰めてから梯子

初代勝川春亭は中古屈指の浮世繪師なるが至つて洒落の人にて四五日遊里に流連し家へ歸らば山の神が入ッの角を振立て怒らんことを恐れ是を避るには何をがなど工風の末手遊びの階梯一挺買ひ來り自己の敷居へ件の階梯を

掛け頻りと登る真似を爲し居るを女房が見咎め、れ前何だね其所で氣違ひ染た真似をしてと言はれて春亭天窓を搔き何うも敷居が高くつて此様な階梯ぢや迎も登れん嗚あ手を貸して引ッ張つて呉れ、何んだね馬鹿くしいと格子子を明けて内へ入れ爲めに此朝は格別の風波もなかりしといふ

◎毒を嘗ず指を嘗む

義經の蝦夷に行きし時土人進むるに毒を以てす義經之を悟り其毒を中指に付して而して食

指を嘗む神色自若たり土人大に恐れ直に服従す

◎頭を打て却て禮を受く

一日兩人相會して世間話を爲す突然握拳を以て一人の頭を打つ大に怒て曰く君何ぞ失敬なる何の恨あつて我が頭を打つやと答て曰く君の怒更に其意を得ず今君の頭上に蚊の集り來るあり余是を以て打拂へりと

◎手代の失敗

ランプ類を行商して糊口を凌ぐ者あり或金満

家へ至り求められん事を乞ふ手代出来り曰く
貴様の商賣は誠に劍呑なる者なり若し誤て破
損せば如何するや答て曰く仕入るのみ又曰く
再三破損し資本を失へば如何答へて曰く其時
は止を得ず貴殿の如く人に召使はれるなりと
云へば手代大に赤面したりと云ふ

◎宇兵衛は宇兵衛

徳田宇兵衛は薩州侯の家老なり才智卓絶和歌
を善くす一日侯に従て共に騎馬に上出づ誤て
落馬す侯冷笑して云く宇兵衛歌は如何くと

宇兵衛忽ち即詠して

ひんどはねすどんど落る其隙に

どうして歌が詠るもの哉

◎瀛船の走るを止むる法

數名相會し海岸の高樓に宴す黒烟一抹瀛船の
走るを見る一人云く彼の瀛船を止る法ありや
一人云く法ありと立て障子を閉づ又一人云く
君が法迂遠と云ふべし眼を閉るの速きに如か
ず

◎焼芋なら十三里

或人へ友人某來れり主人云く今日は生憎馳走が無く只青物計りなりと云へは友人云く私は生來青物が大好きで三里の道も態々行て食ふと云ふ其後來る主人云く君は青物が大好なれ共今日は魚類計なり君如何なすや答て云く魚肉なれば五里でも行て食ふと云へり

◎先生の失敗

某先生常に晝寢を好む而して遇々門人の晝寢を見る時は大に腹立せり一日門人云く先生は能く晝寢を爲す是宜しきや先生云く我は夢に

周公に見ゆるなりと生徒云く小生も周公に見ゆるなり先生云ふ然らば周公は何と云ひしや答て云ふ周公が云く余未だ嘗て夢に汝の先生に逢はずと

◎主人の失敗

舊弊の主人一日小僧を従へ行く途中死したる鼠の捨てあるを見て主人小僧に謂て云く我年は鼠の支干なり彼の鼠を人の往來せざる處に埋めよと聞て小僧主人に云く主公の支干が午や丑にあらざるを以て私は仕合なりと主人愧

づる色あり。

◎衛生家

或處に衛生會なるものありて定期演說會を開く然るに同會長演說の壇に登る毎に夜間の暴飲食を戒む一日村落を巡回するに際し戸長の家に於て饗應の榮を受け夜間暴飲暴食して大に銘酐し前後を知らざる者の如し役場の書役醒を俟て之を責めて曰く汝言行一致せず甚だ不都合なり以後誰か會長の任を以て許さんと會長之れに答へて曰く君の言や不可なし余夙

に暴食暴飲の衛生上に大害あることを知る故に未だ嘗て之れを爲さず然れども經驗なくして説くは不信切の至りならずや故に余は今日之を實驗したるなりと

◎物を取返す法

山田仙太郎なる人意氣揚々金の指輪をはめ某樓へ遊び某妓を聘す妓曰く山田様願くは其指輪を妾に賜はらんとをと云へば山田曰く善し汝に遣はさんシカシ余の云ふ事を聞けよ妓曰く何事にて聞くと山田曰く今の指輪を返し

呉れ汝何事でも聞くと云ひしなり

◎頓智が道連れ

某或時一人旅行し松原を日暮通行する折柄向ふより雲突く計りの強賊路を掩て來る某願て曰く諸君早く來れくとサモ數人の友を呼ぶ風情を爲せば賊は逃げ去りしと

◎物置場に入て出で來らず

或家へ強盜一人押入り主人に逼るに例の文句を以てす主人少しも騒がず曰く有金は悉皆出す可しと立て物置場へる入盜之に従ひ物置場

の口に立番せり一時間計り待つと雖も主人出で來らず其内に主人は既に屋根へ抜け出で大聲を發すれば近隣の人皆集り來る賊驚き一品も取得ずして遁げ去れり

◎病者と醫者

或人眼を病む他より之を見れば少しも病む様ならず醫者に其眼を指さしめ以て術の巧拙を試んとす醫者能く之を見て云く右の眼なり或人云く否左なり醫者云く我方より見れば右なり足下の方にあつては勿論左なりと

◎ 困つた故頓智

昔力士谷風が當時日の下開山と爲るとき大坂
力士の八角或る豪商の依頼に由り如何不して
谷風を負さばやと種々工風の末ふと思付きし
とあり扱て谷風と取組の時充分仕切を張り谷
風の氣合已に充滿するを見てまつたと云て其
氣を抜き後取組で之に勝たり是れ角力社會噺
矢なりと云ふ

◎ 滑かに解けたも道理薯汁なり

曾て後藤象次郎氏が土州の人々を高輪の自邸

に招きて宴會を開きしとき米國に於て病死せ
し故馬場辰猪氏が演説をなして今日の宴會は
誠に喜ばしき事のみなれども唯一つ殺風景な
るものあり云々として某氏に向け攻撃を加へた
るに之を聞いて腹に据ぬ兼ねたりけん突然氏
に打て蒐り雙方負けしと組打して中々引分け
べきもあらざりしに傍に居合はせたる何某は
即座の氣轉にて有合ふ薯汁を引寄せて二人の
中へ被せければさしもの組打も遂に滑かに解
けたりと云

◎不思議の講釋

アイルランドの或耶蘇僧官が一日神の不思議なる事に就き説教し歸る道にて傍聽者の一人いふ貴官よ彼の不思議なる事とは如何なる譯か最少し悉しく説き明し下されよ僧官曰く汝は不思議なる事の意味を聞きたいか然らば前に歩け我汝に説き明すべしと時に其人は先立ちて歩さしが僧官は其後になるや否や甚く彼を蹴たり其人驚て曰く何事をするか僧官問ふ汝はそれを痛いとか何とか感じたか其人答て

固よりの事だ僧官曰く然るべし若し之を感じなかつたらば即ち不思議なる事といふ

◎助太刀

或人僕を従へて旅行す途中夜に入りたれば頻りに途を急ぐ果して賊に遇ふ賊は刀を抜き向ひ來る或人蝙蝠傘を以て之を受け一上一下戦ふ内僕は稍々暫くあつて曰く主君定めてお勞れならん僕一本ね換り申さんと云へば賊は助太刀有つては叶はじと思ひけん一散に逃げ去れり

◎ 雜巾の夢

維新の頃或家の主人至つて御幣擔ぎにて何事
 となく兎角氣になる性なりしが不幸續き身代
 追々不如意となれり其年正月三日の朝友人訪
 ひ來りしに顔色常ならず友人問ふ貴兄如何さ
 れしや主人答て曰く予は病にあらず昨夜は正
 月二日なり正夢とて世人夢を以て年の吉凶を
 占す然るに余は雜巾を冠りし夢を見たり雜巾
 は即ち縷なり之を冠るは乞食に零落するの前
 兆ならんと友人冷笑して曰く否然らず實に吉

夢なり一言を以て祝せよと

雜巾とあて字に書けば藏に金
 定めてこれはふくものになん

◎ 實もあり味もあり

芝居役者市川海老藏大坂へ赴かんとて澤村訥
 子の許へ暇請に行き歸るとき訥子も玄關迄送
 り出づ海老藏履物をはくとて如何しけん誤て
 放屁をしければ同人不取敢「ふつと出て顔に紅
 葉をねき土産」と云ひければ訥子が「あまり臭さ
 に錢別もせず」と即答しけり

◎ 那々成程

或人問て曰く耻をかいた人と酒を飲だ人とは何う違ひ升か答て曰く耻をかいた人は顔を赤くし酒を飲だ人は赤ひ顔をする

◎ 一言賊を走らす

河内山宗心少年の時或日村祭にて親類へ招かれ其夜一泊しけるに夜半一賊抜刀を携へ宗心の寢間へ押入り例の文句で宗心に迫る宗心曰く吾は此家の者にあらず祭禮に招かれ一泊せる者なり此家の主人は未だ數名の客と此二階

にて圍碁を爲し居れり其處へ案内せんと先にたち二階へ上らんとせば賊之を信となし一散に逃走りたり

◎ 小僧の困却

與様小僧に謂て云くね前あの犬を外へ連れて運動さしてねいで小僧云く彼の犬はさうしても私の後に付いて参りません與様ぬからん顔して云くそれぢやね前が犬の後に付いておいで

◎ 菓小屋

加藤廣吉といふ理髮師あり廿七八年の役軍人に隨ひて戰地に赴く事となり妻子を實家へ歸らしめ自身所有の家屋は人に頼みて貸家とせり其人「貸家札を書いて下さい」と言はれたれども廣吉は鉄こそ持ちしも筆持ちし事なければかしやと書く眞似も出來ず遂に出立の朝白紙の中央へ煎餅一枚を張り付けて去れり後近所の大評判となりたり是れかし家と云ふ頓智なりしとぞ

◎鐘馗の畫寢

加藤遠澤曾て鐘馗午睡の圖を巨額に畫き某神社の拜殿に掲ぐ或人其圖の不經なるを毀る遠澤曰く彼圖は古今未だ曾て畫くものあるを聞かず然れども凡そ生あるものは必ず睡あり鐘馗は常に目を睥らし膽を張り休息することなくして厲鬼を驅却することを勉む唯一の神殿のみは其安眠の地たるを以て斯くは寫せしなりと弟子等大ひに服せりとぞ

◎量入制出

竹田勝千代(信玄)幼時五六の小姓を召連れて野

外に遊びけるに時しも秋の末にして天氣朗か
なりしかばいでや之より雲雀を捕へて多く得
たる者には褒美を遣はさんとありければ童小
姓われもくくと走り運りて捕ふるに勝千代の
獲物尤も多かりけり小姓共は扱も若君のれ手
の早き事よと賞め立つれば勝千代は従容とし
ていやとよ吾手足の早さにはあらず凡て雲雀
は伶俐の鳥なれば空中より舞下るときは直ち
に麥の間に入りそれより潜行して己が巢に至
る然るに汝等は雲雀の舞下る處をのみ探し求

むる故巢を見出すこと稀なり吾は雲雀の飛出
し處を見定めて尋ぬる故其巢に行當らざるこ
となしと語られしとぞ

◎ 脇坂七兵衛奇行録

加州金澤藩士に脇坂七兵衛なる者あり奇を以
て藩中に聞ゆ加州人にして七兵衛の名を知ら
ざる者なし七兵衛儉約を主とし常に弊衣破袴
を着し寸許の切れを以て之を補綴し其縞目分
明ならず冠りし破笠は椀或は合羽紙を當て、
補ひ草履は長刀の如くにして其製左右を異に

す七兵衛主張する處は積年の治世にて藩士は驕りに長じ武備の廢れんとを歎じ之を回復せんとするにあり故に自ら武を嗜み刀槍等の術に至ては奥義を窮めざるなし俸祿最も薄しと雖自ら貯ふ處の武具は善美にして且整頓するは千石の上により是れ即ち平常儉約にして武備を修んどの持論より生ずるなり故に殿中に出仕するにも乞食然たる衣袴を着し意氣揚々傍若無人たり而して其常に帶ぶる所の雙刀は外面誠に粗麁なりと雖ども其秋水一見人をして

て悚然たゆしむ維新前藩主服制を改め稍緩にせんとし殿中にてそぎ袖羽織袴高袴を着するを許し足袋は白紺入交せ不苦と蓋し従前の禁を解きしものなり七兵衛羽織袖の上部をそぎへらく然たるを着し左に白右に紺の足袋を穿ちて出仕す横目役之を答ひ七兵衛曰く前日の命に随ふと横目役くそぎ袖とは筒袖を云ひ足袋は白を穿つも紺色なるも苦しからざる義なりと七兵衛之を詰て曰くそぎ袂とあれば可なりそぎ袖とある限りは何ぞ上下の部を論せ

ん又白紺足袋入交るときは左右色を異にせざる可らず若し夫れ貴説の如くせんには白足袋を穿つも紺足袋を穿つも不苦とあるべきなりと當時藩主有志者をして洋式操練を習はしむ藩疾くに壯猶館を設け之に入らしむ七兵衛時に年六十に近し壯者と共に率先して入館し教師或は生徒運動の歩尺違ふを責め自ら歩して之を示す七兵衛懷中より曲尺を出し教師の歩尺を檢して曰く先生も亦規則に違へりと或は大刀を帯び隊伍に列す左右に向くとき隣兵に

觸るゝを以て教師之を制す七兵衛曰く我藩未だ刀の寸尺の制限なし且此刀一たび戰場に試みると欲す故に帶ぶるのみと七兵衛の履物其緒を赤にし又黑白等常に異形なり壯者之を他に匿して七兵衛を困窮せしむ七兵衛其時々書面を以て之を公けに訴ふ取締役諭して曰く之れ不注意より生ずと夫より七兵衛大なる藏の錠を携帶し破草履に之を卸し其錠を腰にす然れども其後は早く上達し我屋敷内に道場を建て部下足輕に兵式を教授す場外小便桶を並べ

入口に小便館と大書したる額を掲ぐ人其奇を詰る七兵衛答て曰く我小祿にして意の如くならず固より藩設の壯猶館に及ばざると萬々なり然れども部下を教授するは之れ藩主に對し○小しく便りともなれかしと此館○を設くる所以なり故に小便館と名づくるのみと七兵衛娘あり同藩士に嫁せしむ媒者云ふ決して心配は無用なり衣類の如き拵へは好まず只裸體の儘當入を貰はんとのとなりと七兵衛之を領し期に至り人を附し婚家に遣はし且云はしめて云ふ

豫て裸體の御所望なれども途中は在合せの衣服を着せしめたり請ふ此者に御返しあれと媒者大に驚く後里のまごびら開きをなす媒者七兵衛に請ふて曰く曩に心配は無用と云ひしなれども餘り殺風景なれば赤飯位はれ送りありたしと恐るく云ふ七兵衛大に悦び實は一人娘なれば心配とんぱいするなどと欲すれども先方の好みにて萬事飯を送るは固より希ふ處なりとて赤飯數石を蒸し大八車數輛をして之を運ばしむ後數月を

經新夫婦の居り合ひを見七兵衛金三百兩を持
参し娘に與へて曰く之れ汝嫁入の用意金なり
婚家衣類等拵へを好まず今此金其儘にあり汝
嫁する上は此金亦如何ともする道なし汝の小
遣錢にすべしと當時中下士の嫁入は百兩乃至
二百兩を費す然るに三百金を與ふ聞く人皆感
服し且其良人を擇ぶに衣類道具を眼に掛けず
娘を所望すると又借老の交を見定め金を送る
等の氣量に驚く七兵衛寒中罽網の羽織を着す
人之を詰て曰く君此寒中に薄羽織を着す寒か

らずやと七兵衛其人の羽織を見て曰君の羽織
は羅紗なれども單へにて寒中には不規則なり
予はこれ裏附け羽織なりと之を示せば網を二
枚重ねてありし或る日組下の足輕を我屋敷に
招き七兵衛具足を着し床几に掛り武具を排列
し衆に諭して曰く七兵衛の戰場に出る有様を
見覺へ置くべし予常に弊衣破袴を着するを以
て戰場に於ても佐野源左衛門の如く破れ腹巻
に鎗長刀を持つものと想像し實地に予を見過
つては不都合なりと夫より數時間武を講せし

に部下皆其威に恐れ頓首敬拜す此中には常に異風なるを竊かに嘲けりし者もありしが大に恥ぢしと云ふ時に藩主始て上京す七兵衛其供を命せらる七兵衛道中の服装平日の異風を改めず彼の袴や合羽にて補綴したる三四尺もある大笠を冠り傍ら人無きが如し横目役他藩士に笑はれんとを恐れ之を制せんと欲すれども笠の寸法はいつ御制限になりし杯やり込められては事ならず諭すに如かずと竊かに七兵衛を呼び君の笠餘りに大にして行列中他士に障

り爲めに行列亂るれば今少しく小形にして如何と七兵衛之を領承し翌日は大笠を廢し馬提灯の小笠を外し之に代へ紐を附して冠る笠の兩脇より雙耳顯はる列中大に笑ふ此の如きと屢なるを以て藩主の耳にも入れと主は彼の七兵衛は特志の者なり何予の用に立つべきとあるべし捨てし置きよとの命なり扱京都に着す同僚の者皆云ふ七兵衛金澤に在ては常々我等を愚弄す彼他國に出もは今度始てなり何とか彼を困まらせんと期を定め七兵衛に祇園町某

樓に遊ばんと約す七兵衛諾す期に至れば同僚
 今日こそ七兵衛に負るなど手筈を定め且故ら
 に古着屋より弊衣を求めて之を着し某樓に到
 るに七兵衛來らず屢々婢をして客の來るを尋
 ぬ而して客來る上にあらざれば杯盤を出す可
 らずと婢皆其弊衣に驚く然れども上等の料理
 を命じ且一人の來客を頻りに待つ故これ貧書
 生の旦那を待ちしならんと想像す須くあつて
 七兵衛絹衣を着し仙台平の袴に黒縮緬の羽織
 にて金銀をちりばめたる大小を帶し意氣揚々

として來る婢同聲に殿様の御入りと云ふ轟き
 に待ち退屈したる弊衣連中之を聞き殿様御入
 とは誰ならんと思はず廊下に出で、見れば七
 兵衛恰も貧書生等の出迎ひたる風情にて一禮
 して通る衆皆調子は外れたれども止むべきに
 非らざれば杯盤を命じ妓を引き宴を始む妓等
 皆七兵衛を殿様と稱し之をもてなし他を家來
 視す後七兵衛衆に謂て曰く常々儉約するも斯
 様なる都會にて殊に他藩士も來る青樓の如き
 に到るには身なりを繕ふ爲めなり君等の風體

は何事予實に我藩の恥ぢなりと之を戒む衆答
ふるものなし而して又再び七兵衛に抗するも
のなし後ち置縣に際し廢刀の令出て士族商法
を許さる當時鳶合羽大に流行す七兵衛大なる
播木に茶臺をはめ之を帶すると雙刀の如し陣
羽織に他の袖を着し鳶合羽の如くす從者に長
柄の傘を指し掛けさせ大箱を首に掛け飴賣を
始む或は鐵杖をつきて散歩す常に異形の風に
て市中を散歩し人の笑ふを樂みとす七兵衛常
に一尺五六寸もある朱塗の印籠を腰に下げ公

私を論せず必ず携帯し座に着けば之を左右に
置く或人七兵衛に謂て曰く君の印籠は實に見
事なるものなり其中には何品を入れらるゝや
と七兵衛笑て只必用品を入れる而已と云ふ或
人又曰く君は常々節儉を主とせらる我々は兎
角臺所向不如意にて甚だ厚顔の至りなれども
御貯蓄もあれば御助力ありたしと七兵衛曰く
其れは實に御氣の毒の至りなり士は相互ひな
れば些少なれども在合の中少々御用立可申と
て彼の印籠中より百兩包の金を出して某の前

に置けり某も實は愚弄半分に云ひしとなれば
 大に赤面し程能く謝して之を返せり又或夏大
 暑の日友人兩三輩七兵衛を驚かさんと冬衣を
 着重ね簑笠に身を固め雪中見舞と號し七兵衛
 の家を訪ふ七兵衛僕をして之を座敷に通し且
 云はしめて口く主人此頃の寒氣に弱り休息罷
 在る去れども折角の御入來故追付可得尊顏先
 づ其れ迄は雪路の勞を慰せんと屏風を建廻し
 且火鉢若干に火を與して出せり某等其熱度に
 堪へ難く早々謝して遁げたり七兵衛老年に及

ぶも散歩は怠らず故に無病なり一子あり五太
 藏と云ふ曾て華街に遊ぶ樓主書附を齎らし其
 償を求む過つて七兵衛の手に入る七兵衛直に
 古道具屋數名を呼び諸道具疊建具の糶賣を始
 む其妻之を異とし其故を問ふ七兵衛樓主の言
 附を示して曰く家財を賣らざれば此の如き冗
 費を拂ふの道なしと五太藏他より歸り之を聞
 き大に驚き親類中を馳廻り哀を請ふ親族協議
 して其費を償ひ七兵衛に謝して曰くこれ樓主
 の間違にて五太藏の遊興せしにわらずと爰に

於て漸く解くるとを得たり五太藏大に悟り再び遊興せず維新後五十歳以上の士族は多く隠居して壯年の悴に家督を譲り閑齋とか耕雲とか異なる名を附けり七兵衛亦倅五太藏に家督を譲る然れども名は依然七兵衛たり或人曰く隠居すれば俗稱を廢して名を改むるものなり君何故改めすと七兵衛曰く予の名は藩主始め金澤の人にして知らざるものなし今俄かに改めなば甚だ不便ならん去れども世俗に隨はざるも亦不都合なれば今より七兵太と改んと終

に七兵太と改稱し益々人に名を知らる蓋し加州の方言に尻のとをシチベタと云ふ七兵太孫兒あり大に之を愛し常に美服を着せしめ自ら携へて散歩す市中到る所兒輩群をなし七兵太來りて尾す七兵衛甚だ温順徳厚の君子なり身體は最も強壯なりと雖も今年は早や殆んど八十歳に垂んたり

◎見かけに依らぬ

名古屋市書籍商仲間の拮粹七人新年宴會を催し宴終りて一人の發起者あり曰く未だ何とな

く物足りない心地あり第二次會を開かんと又一人曰く普通の遊びは面白からず僕に趣向あり此連中の中にて一人の案内者を撰み其人に特權を與へて萬事爲す所に任せ他の者は所謂お客となるべしと忽ち満場一致にて同意を表せり是に於て撰擧を爲せしに意外にも連中の一番年少者に當撰せり衆其爲す所を危ぶめり少年即ち便所に行くと言ふ稱し内々或家へ電話を以て通じて云く今より其方へ七八連にて行く故特別の座敷へ火鉢座蒲團の用意あるべし又

某妓二人は直に聘に應ずる用意せよと倉卒座に歸り素知らぬ顔して居たり已にして七臺の車も來り一同其處を出で少年先きに立ち或る見苦しき一料理屋に到る皆一驚を喫し奥の間へ通れば新築の立派なる座敷あり已に七人前の客の用意あり又一驚を喫す少年屋根づたいにて其裏通りの藝者に言て云く今より直に來れど程もなく杯洗の音と共に二人の妓顯れたり衆又一驚せり而して其出づる料理漬物とこのわたと云ふ實に上戸の腹をゑぐらせるもの

満座其趣向の機敏を賞す

◎一場の演劇

三井呉服店理事にして鐘淵紡績會社の専務取締役なる朝吹英二君曾て藝妓と待合に在り時に女將低聲に曰く警官來ると君忽ち妓を浴室に入らしめ自ら三介に扮す已にして警官來る妓云くアラこんな處へ御出でたわ英さん御座敷へ案内して頂戴よと恰も待合の娘の如し警官亦咎めずして去る

◎鶴の一聲

樂善堂主人岸田吟香日清戰爭の戦捷會を上野に催すや楠本正隆、末廣重恭、三浦安等の演説あれども幾萬の衆喧騒して意義通せず君最後に登壇し恭しく四方に禮し大聲して曰く「皆さん我日本が勝ちましたして御日出どう」と幾萬の會員大喝采して君の氣轉を賞す

◎軍畧

十文字信介の少年の頃兵學校と在り一日大に雪ふる即ち同窓相計りて雪戦を始む幾度戦ふも君の指揮する隊は勝たざるとなし何ぞ知ら

ん君は手桶に熱湯を入れて交々手を温めさせ
随意に働かしめたりしを

◎お供は頓智

日本郵船會社々長加藤正義の十二三歳の頃用
を帯ひて近國に到る途中山路日已に暮れんと
す突然一人の強盗出で例の文句を以て逼る君
平然として云く財囊は荷物と共に供丁の擔かたぐ
所今二三町遅れたり汝就て尋ねよと賊之を信
じて去れり

◎策畧の廣告

書肆金港堂主人曾て故郷岐阜震災に際し卒然
其地に到り俱つぎに災害を視察し直に岐阜新聞に
廣告して「當銀行は此際御入用の金額は何時に
ても御引出に應ず」と是れ君の監督する九十五
銀行の取付急に多からんを思ふて斯く廣告を
出し以て銀行の鞏固きやうこなるを示さん爲めの策畧
なりしと云ふ

○辯解を要せず

尾州の酢屋中井半三郎或る女郎を根引せりと
聞き友人大に諫むる所あらんとして君を訪ふ

君辨明するを厭ひ自ら發狂せりと稱し其面會
を謝絶す何ぞ知らん其女郎は舊主人の女にし
て君は徳義を以て救ひ出したるものなりと云
ふ

頓智叢談終

明治三十四年二月廿五日印刷

明治三十四年三月九日發行

編者 櫻雲山人

東京市日本橋區新右衛門町十三番地

發行者 木田吉太郎

東京市本所區横綱町三丁目拾八番地

印刷者 黒木銚太郎

全市全區全町全番地

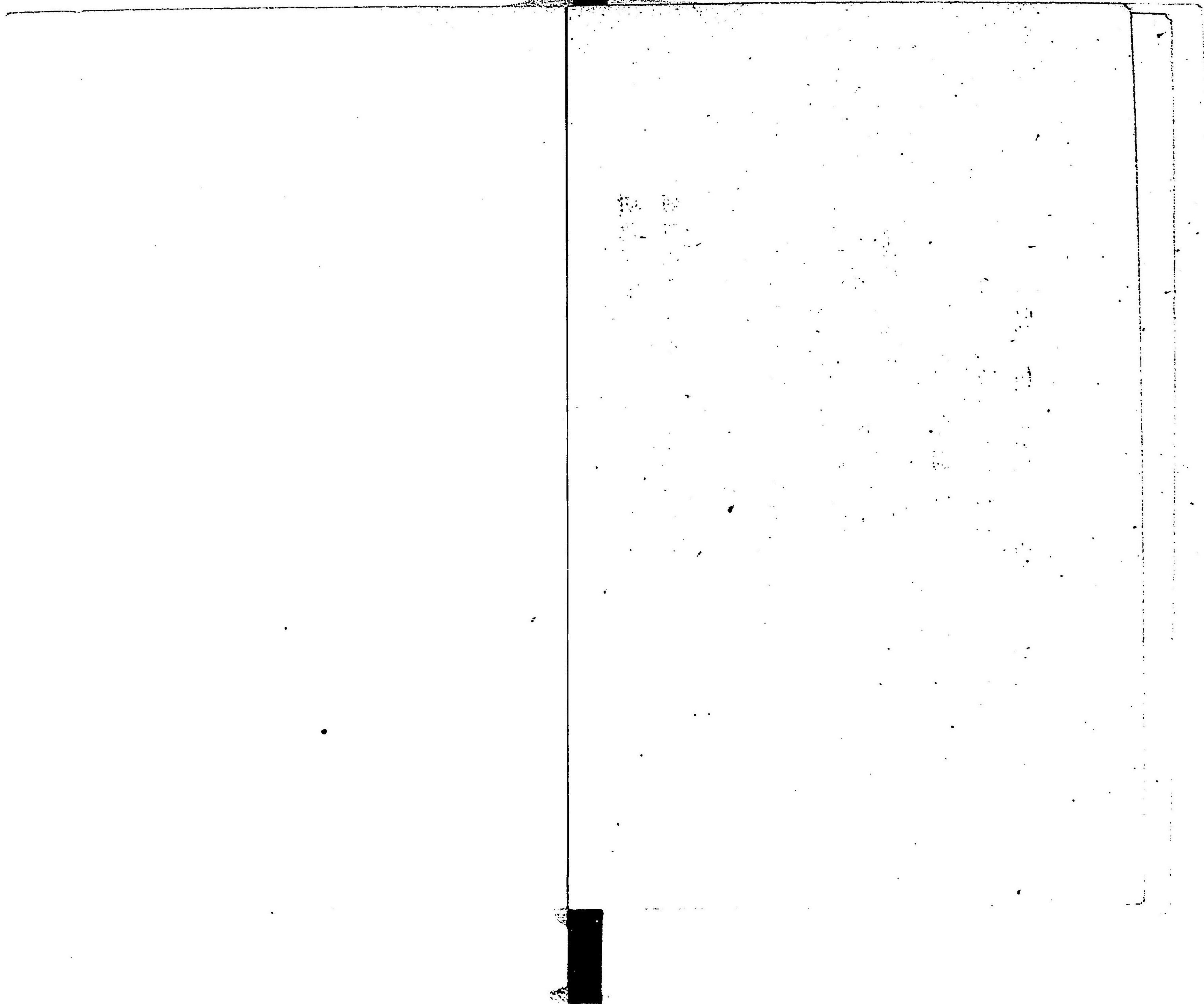
印刷所 本所活版所

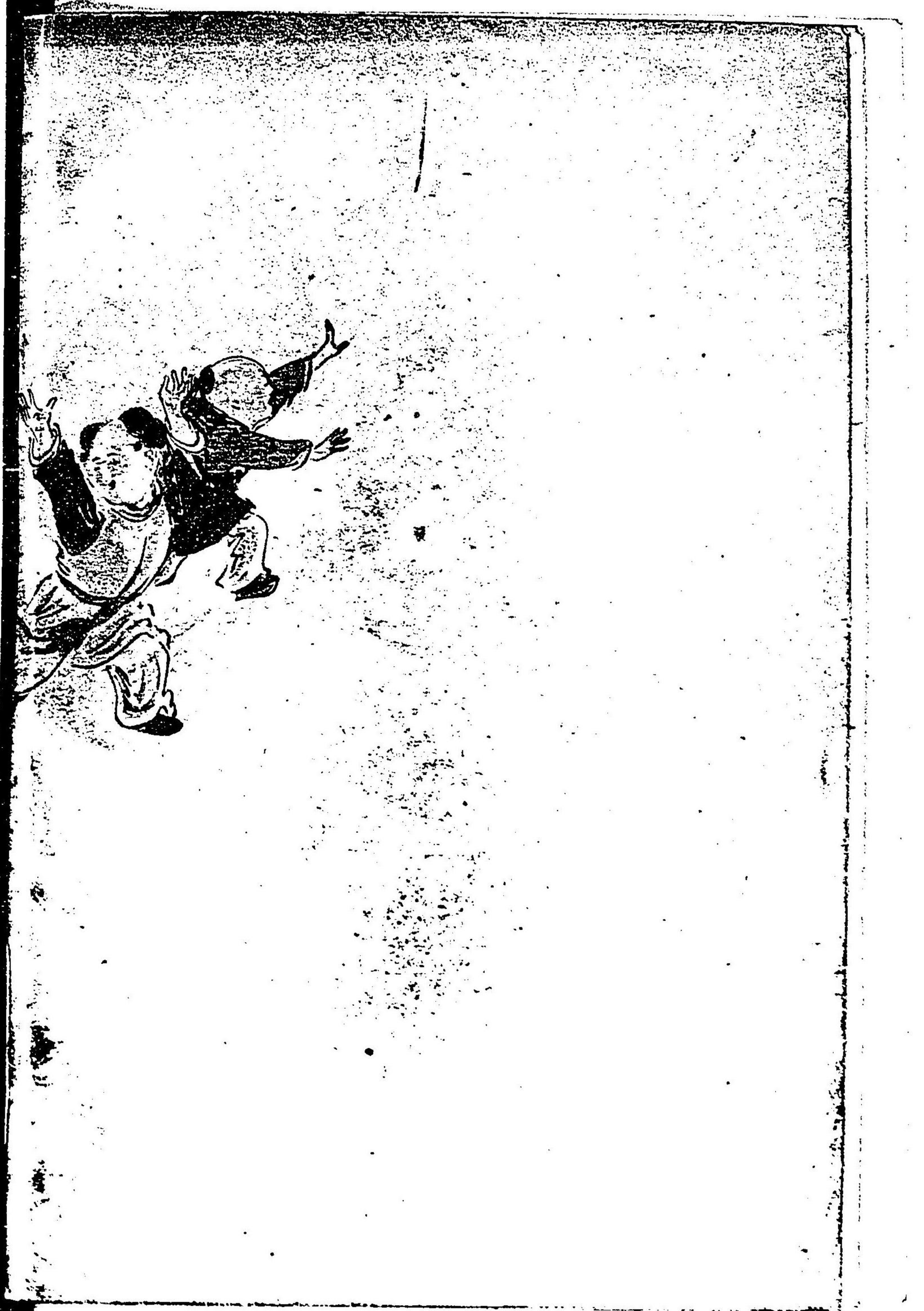
東京市日本橋區新右衛門町十三番地

發行所 集文館



複製 不許







091817-000-2

特63-460

頓智叢談

桜雲山人／編

M34

DBO-0334

